

令和2年度
常葉大学 学生自主企画
とこは未来塾 -TU can Project
活動報告書



常葉大学
常葉大学短期大学部

目次

とこは未来塾 -TU can Project 概要	2
採択プロジェクト一覧	3

令和2年度採択プロジェクト 報告書・ポスター

1. 子育て支援プロジェクト「おもちゃスタート」ー赤ちゃんにおもちゃを届けようー	4
2. サイエンスカフェ	8
3. Dear 静岡人 ～みつけた！コロナに負けない静岡～	12
4. Gender equality for students ー静岡市におけるジェンダー教育の推進ー	16
5. 自治体職員向け建物被害調査プログラムの開発と試行	20
6. コロナウイルスに負けないぞ！ ～みんなで守って げんきっず～	24
7. 学生トレーナーによる高校運動部に所属する生徒へのコンディショニングセミナー事業	28
8. 運動部に所属する子どもの保護者への栄養セミナー ー勝負に挑むジュニアアスリートの縁の下の力持ちー	32
9. アスリートのためのサボ飯 ー腹が減っては勝負は出来ぬー	36
10. 東日本大震災から10年、「未来に繋ぐ」これからの10年	40
11. 心身マネジメント学科の学びを活かした安全教育教材の開発	44

『令和2年度 ところは未来塾 -TU can Project』

「ところは未来塾 -TU can Project」は、本学の専門性及び地域の特性を活かして、地域社会・地域産業の様々な課題に学生が自主的・主体的に取り組むことを支援するものです。

1. 目的

学生ならではのユニークな「視点と発想」をもち、「熱意と創意」に満ちた自主的・自発的な取組に対し、大学から教員アドバイザーによる助言や活動資金の援助などの様々な支援を行う。大学が立地する静岡県を中心とした地域社会への貢献を果たすとともに、学生の若い力を地域の活性化に結び付ける。

2. 募集分野

(1) タイプA：開かれた大学づくりプロジェクト

キャンパス内で様々な地域交流活動を企画し、本学が標榜する「開かれた大学づくり」への貢献を目指す取り組み。

(2) タイプB：地域貢献・活性化プロジェクト

県内各地の地域課題の解決や地域活性化への貢献を目指す取り組み。

(3) タイプC：現代的課題解決プロジェクト

各種の研究開発や調査研究などを通して、社会的・公共的な課題解決への貢献を目指す取り組み。

3. 審査基準

- (1) 学生が問題意識を持ち、主体的に設定した明確な目的があること。
- (2) 本学の教育理念・3ポリシーとの関連で、意義が認められる。
- (3) 学内ないし地域の活性化もしくは課題解決が期待できる。
- (4) 多様なメンバーから組織され、適切な役割分担がなされている。
- (5) 明確な実行計画が示されており、着実な推進が期待できる。
- (6) 具体的かつ妥当な予算が計上され、執行計画が示されている。
- (7) 成果の見通しならびに成果還元の方法が具体的である。

4. 助成金額

- 1 プロジェクトあたり 15 万円を限度とする。

令和2年度とこは未来塾 –TU can Project 採択プロジェクト一覧

No.	キャンパス	タイプ	テーマ	グループ名
1	静岡 草薙	B	子育て支援プロジェクト「おもちゃスタート」 ー赤ちゃんにおもちゃを届けようー	子どもと保育の未来空間 (保育学部村上ゼミ)
2	静岡 瀬名	B	サイエンスカフェ	村井ゼミ
3	静岡 水落	B	Dear静岡人 ～みつけた！ コロナに負けない静岡～	ミズオチ交流会
4	静岡 草薙	C	Gender equality for students ー静岡市におけるジェンダー教育の推進ー	ジェンダー研究プロジェクト
5	静岡 草薙	C	自治体職員向け建物被害調査プログラムの開発と試行	合同田中ゼミ
6	静岡 草薙	C	コロナウイルスに負けないぞ！ ～みんなで守って げんきっず～	保育学部赤塚ゼミ3年
7	浜松	A	学生トレーナーによる高校運動部に所属する生徒への コンディショニングセミナー事業	ATサークル CATS
8	浜松	B	運動部に所属する子どもの保護者への栄養セミナー -勝負に挑むジュニアアスリートの縁の下の力持ち-	食プロデュースサークル スポーツ栄養学グループ
9	浜松	B	アスリートのためのサボ飯 -腹が減っては勝負は出来ぬ-	食プロデュースサークル
10	浜松	B	東日本大震災から10年、「未来に繋ぐ」これからの10年	3.11はままつ東北復光プロジェクト
11	浜松	B	心身マネジメント学科の学びを活かした 安全教育教材の開発	木村ゼミ

タイプA：開かれた大学づくりプロジェクト

タイプB：地域貢献・活性化プロジェクト

タイプC：現代的課題解決プロジェクト

子育て支援プロジェクト「おもちゃスタート」 —赤ちゃんにおもちゃを届けよう—

所属：村上博文ゼミ

保育学部 新庄玲奈(代表)、三島愛加(代表)、佐野このみ(会計)、他村上ゼミ 1～4 年計 41 名

1. 目的・概要

今日、子ども・子育てをめぐる現状は、少子化、核家族化、ひとり親家庭の増加、貧困による格差、そして昨年から続いているコロナ禍等によって、これまで以上に過酷になってきている。それにともない、子育てに対して孤立感や負担感を感じている保護者も少なくない。その対策として、各自治体では子育て家庭に対して様々な支援を行っているが、それがすべての保護者にとって満足のいくものになることは容易ではない。

そうした現実を鑑み、保育者を目指し、本学保育学部にて保育や育児の知識や技術等を専門的に学んでいる学生として、「保護者が子どもとかかわることを楽しんでもらえるように何かできることはないか」という気持ちを抱くようになった。そうした願いから企画されたのが、「おもちゃスタート」である。自らの手でおもちゃをつくり、それを子どもと保護者に届け、ともに楽しく遊ぶ機会づくりを提供することが、本プロジェクトの目的である。

本プロジェクトを通じて、保護者の方々が育児の楽しさを再発見すると同時に、保育者を目指す学生にとっても育児の楽しさや大変さなど、その現実を知る機会としていきたい。また本プロジェクトが、本学の学生として「知徳」をもって、「地域」の「未来」づくりに貢献するという、本学の理念を実現する活動につながると考えている。

2. 実践内容・方法

本プロジェクトでは、親子関係の構築支援を図るため、また親子で一緒に遊ぶための機会づくりとして、手づくりおもちゃを保護者に届ける。具体的な実践の内容・方法については、以下の通りである。また活動の流れは、次頁にある表 1 の通りである。

(1) プロジェクトの周知—静岡市子育て支援団体連絡会との連携—

まずは、本ゼミが所属する静岡市子育て支援団体連絡会（静岡市子ども未来局子ども未来課）に連絡し、プロジェクトの概要を説明した。連絡会より協力に対する快諾の連絡があり、さっそく連絡会に登録している子育て団体に本プロジェクトを知らせるためのチラシを作成し、配布した（写真 1）。そして手づくりおもちゃ（0-2 歳児用）を希望する保護者を、各団体を通じて募集した。

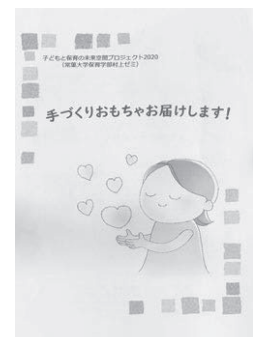


写真 1 チラシ

(2) おもちゃの製作（写真 2）

制作するおもちゃについて、代表者を中心に 0-2 歳児の発達にふさわしく、親子で楽

しく遊ぶことができる、また危険性の配慮という観点から検討を重ねた。制作したおもちゃは、光を通して色の変化を楽しむカラーセロファン、手指の発達を促しアイスクリームの形でユーモアのあるボタンかけ、ティッシュ箱から無限に布が出てくる無限ティッシュやカラフルで掴みやすいスポンジボール等、合計8種類である。

おもちゃの製作は、1～4年生を含む10人の4グループで行った。各グループには、リーダー、材料準備、おもちゃ製作などの担当を置いた。制作時には、感染症対策（広い教室の確保、検温、消毒）を行った。またZoom等を使って、製作方法などについて意見を交換しあう機会も設けた。

表1 活動計画

日時	内 容
9 月	静岡市子育て支援団体連絡会（静岡市子ども未来局子ども未来課）へ連絡
10 月	各子育て団体へのチラシ配布 おもちゃづくりの準備 おもちゃ製作
11 月	おもちゃ製作 各子育て団体への連絡 各子育て団体へのおもちゃの配布
12 月	各子育て団体へのおもちゃの配布 保護者へのアンケート実施 卒業生（保育者）からの助言
1 月	おもちゃづくりの再検討（百町森） Zoom 等での反省会

（3）おもちゃの配布（写真3）

希望団体には電話等で事前に連絡を取り、団体の活動場所に伺い、子どもと保護者に対して、自らの手でおもちゃを渡した（配布団体7、おもちゃ総数60）。おもちゃを手渡すと、子どもたちは興味深そうに手に取り、遊び始めた。また保護者も、家にはない手づくりのおもちゃにとっても興味をもっていたようだった。また学生にとっては、保護者から育児に葛藤する悩みや楽しさなど、様々な話を聞く機会にもなった。



写真2 ボタンかけ

（4）今後の活動に向けて一保護者へのアンケート等一

配布後、今回の活動を振り返るために、保護者に対してアンケートへの協力をお願いした。また本プロジェクトについて、保育現場で働いている本学の卒業生や静岡市にて子どもの絵本やおもちゃに関する専門店「百町森」を営んでいる柿田友広さんにアドバイスを頂いた。柿田さんからは、元保育士が考案した手づくりおもちゃを紹介され、とても参考になった。今後の課題として、安全性や子どもが楽しめる魅力の2点が挙げられた。



写真3 手づくりおもちゃを渡す様子（奥わらママ）

<地域との連携>

本活動は、保育学部村上ゼミにおける「子どもと保育の未来空間」という活動の一環である。本活動は、静岡市子育て支援団体連絡会（静岡市子ども未来局子ども未来課）に加盟していることから、今回は連絡会と積極的に連携し、本活動と各子育て支援団体をつなげていく機会になった。

<工夫>

工夫点のひとつは、大学における乳児期の発達や手づくりおもちゃの知識や技術に関する学びを生かし、手づくりのおもちゃを製作したことである。またもう1つは、おもちゃといえば既製品を手にする機会が多い今日だからこそ、子どもの育ちを考えながら、年齢にあった手づくりのおもちゃを製作し、届けた点にある。

3. 事業成果

今回の成果は、3つある。1つめは、育児困難といわれる今日、子どもと保護者の関係づくりという観点から、地域の活性化に取り組んだという点である。その際に、静岡市子育て支援団体連絡会（静岡市子ども未来局子ども未来課）と連携することにより、大学と地域の子育て団体がつながる機会にもなっている。

2つめは、親子で遊ぶといっても、実際にどのように遊んだらよいのかについてわからない保護者も少なくない。そうした保護者にとって、手づくりおもちゃは、子どもと一緒に遊ぶためのきっかけや、実際に子どもと一緒に遊ぶことにより、育児の楽しさを味わう機会になっている。

3つめは、手づくりおもちゃの重要性を再確認する機会になったという点である。先ほども述べたが、既製品のおもちゃで遊ぶ機会が多い今日だからこそ、手づくりで温かみのある、そして作り手の思いや願いが込められたおもちゃを届けることが重要であると考えた。おもちゃを通し、親子が一緒に遊ぶなかでそうした価値を感じてほしかった。保護者からのアンケート結果から、手づくりおもちゃだからこそ、我が子において、これまで気づくことがなかった興味や想像もしない遊びを展開する姿に出会ったという感想が寄せられていた。

4. 今後の展望

今後の活動として、「おもちゃの作り方が知りたい」という保護者の意見に応え、作り方をわかりやすくまとめた資料の配布や、親子で手づくりおもちゃを製作できる機会を設けていきたいと考えている。その理由は、今回、保護者から寄せられた感想において、一番多かった（9件）のが、「作り方が知りたい・今度作ってみたい」という意見であったからである。引き続き、手づくりおもちゃを通じて、子育てに不安や戸惑い、困難を感じている保護者の方々に、「手づくりおもちゃ」にこだわり、親子の温かな時間を通して、より一層子育ての魅力を感じられるような支援を続けていきたい。

子育て支援プロジェクト「おもちゃスタート」 —赤ちゃんにおもちゃを届けよう—

背景

本学の学生として、本学の理念である、「知徳」をもって、「未来」づくりのために、「地域」に貢献することから、今回、子育て最中の保護者の方に、子どもとかかわる楽しさを味わってほしいという願いのもと「おもちゃスタート」を企画した。本プロジェクトにて、学生の手で作るおもちゃには、おもちゃを通じて子どもと保護者が一緒に楽しく遊ぶ機会になればという願いが込められている。

目的

手づくりおもちゃを通して

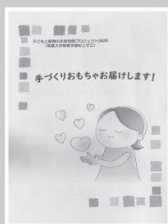
子どもと保護者がともに楽しむ場を、そして保護者に子どもとかかわる面白さや子育ての楽しさを感じる機会をつくりたい。

★おもちゃ製作の準備・届け先の確認<Plan>

静岡市子育て支援団体連絡会（静岡市子ども未来局子ども未来課）と連携し、各子育て団体へ本プロジェクトの周知を行なった。

ゼミ生で、製作するおもちゃの種類・数等を考え、話し合い、活動に取り組んだ。

（おもちゃの種類：カラーセロファン、センサーバッグ、スポンジボール、引き出しティッシュ等）



おもちゃの対象年齢は乳児（0歳児～2歳児）

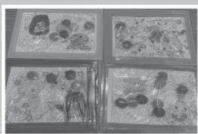
カラーセロファン

光を通して、色の変化や混じり合いを楽しめる



センサーバッグ

ジェルが入ったバッグの中にあるビーズなどを、触ったり、動かしたりすることで、手先の運動になる



★おもちゃの製作・配布<Do>

—おもちゃの製作—

1～4年生を含めた10人の班を4つ作り、リーダー、材料を調達する人、製作するおもちゃの担当を決める人など各班の中で役割を決め、製作を行なった。

（感染症対策のため、密にならない教室の確保、検温・消毒の徹底、zoom等のオンラインを活用）

—おもちゃの配布—

学生の、「自ら作ったおもちゃを、自分たちの手で届けたい!」という思いから、各団体へ直接おもちゃを届ける方法をとった。家がない雰囲気の手づくりおもちゃに対して「どうやって遊ぶんだろうね?」「ピンクと黄色で可愛いね」など、親子のコミュニケーションのきっかけとなっている様子が見られた。

（届け先：奥わらママ、清水中央子育て支援センター、静岡市中央子育て支援センター、ことりの家など）



★実践と指導を手掛かりに玩具の在り方を考える<Act>

—本学卒業生の保育者からの指導とゆっこ先生からの学び—

保育現場で働いている本学の卒業生に、手づくりおもちゃに対するアドバイスをいただいた。また、子どもの絵本やおもちゃに関する専門店である「百町森」（静岡市）に足を運び、元保育士であるゆっこ先生が考案する手づくりおもちゃから、どのような所で安全性に気を付けているのかなどを学んだ。

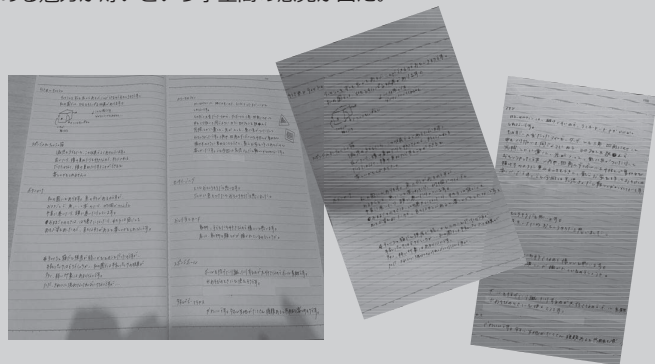
—学んだことを活かし、学生が実際におもちゃを作る機会—

現場の保育者の方やゆっこ先生から学んだことを活かし、実際におもちゃを作った。乳幼児期の遊びが発展かつ充実するためには、手作りおもちゃだからこそ感じられる製作者のおもちゃへ込める思いやぬくもりが大切であると学んだ。



★アンケートの実施及び保育士からの指導<Check>

今後の手づくりおもちゃの改善のため、おもちゃを受け取った家庭にアンケートの協力をいただいた。また、現場で働いている保育者からの手づくりおもちゃに対するアドバイスや、元保育士が考案した手づくりおもちゃについての考察から、今回のおもちゃに対する安全性や子どもが楽しめる魅力が薄いという学生間の意見が出た。



考察—今後の展望—

手づくりおもちゃに対するアンケートでは「既製品にはない温かみと工夫があり子どもに安心して遊ばせることができる」「楽しそうに遊んでくれていた」など団体に所属する保護者から温かい声が寄せられた。また、実際に乳児クラスを受け持っている卒業生である保育者から受けた、おもちゃの実技的な改善の指導や、元保育士が考案したおもちゃを、学生が実際に製作する過程で得た工夫・安全面への気づきは、安全で魅力的な手づくりおもちゃの知識として学びへと繋がった。

今後の展望として、おもちゃの作り方をわかりやすくまとめた資料の配布や、親子で製作できる場を設けるなど、引き続き子どもと保護者が一緒に遊ぶきっかけづくりに励みたい。

サイエンスカフェ

所属：造形学部ビジュアルデザインコース3年・村井ゼミ

造形学部 下山 絢香（代表）、千田 和奈、西山 夢乃、橋山 なぎ紗、渡邊 麻尋、
句坂 柚樹（会計）、河村 織華、松下 あい、村松 真優、
荒石 磨季、杉山 弥鈴、富田 裕子、真栄田 優季

1. プロジェクトの目的・概要

私たちの所属するゼミでは、「人と人とのコミュニケーションをデザインする」コミュニケーションデザインを学んでいます。そこで、人々が出会い、つながることのできる場を「サイエンスカフェ」という形で提供するプロジェクトを実施しました。

サイエンスカフェとは、難しいイメージを持たれる科学について、専門家の講師と参加者が一体となって双方向にやり取りをしながら、ドリンクを片手に科学について楽しく気軽に語りあうイベントです。講義のように一方的に説明する形ではないため、専門家の方と簡単に交流ができ、テーマの堅苦しさもないサイエンスカフェは、誰でも参加のしやすい開かれたイベントであると言えます。

サイエンスカフェによって、普段交わることのない専門家の方と地域の方々が出会い、つながる場を設けることで、地域の人々が今まで知らなかった分野へ視野を広げること、興味を持った内容について周りの人を巻き込んで考察すること、自分にもできることを考えて行動するきっかけになることが期待されます。

また、ゼミに所属する学生の中には将来、企画業務に携わりたいと考えている者もあり、イベントの企画・運営・報告といった流れを最初から学び、実践することは、貴重な体験となります。同時に、言葉だけでなく視覚に訴えてより効果的に伝える方法を身につけるために、ビジュアルデザインを学んでいる私たちにとって、集客・宣伝、カフェの内容の設計を行うことは、今まで学んできたことが実際に通用するかを試す機会となります。

2. 内容・方法

プロジェクトは、全体で、サイエンスカフェの重要な点の確認と事例の参照を行った上で、3つのグループに分かれて行いました。

1. テーマの決定・テイクホームメッセージを考える

どのようなテーマであれば、自らも他者も興味が湧くのかを考えて、アイデア出しを行います。参加者の自発的な思考を促すためには、身近なテーマを設定する必要があるため、出されたアイデアの中から、科学を、社会問題や人間関係などの身近な問題に結びつけて考えられているものを選び出しました。その後、一番強く伝えたいこと＝テイクホームメッセージ（忘れないでほしい重要な点で、家に持って帰って考えてほしいこと）を考えていきます。

2. 講師・内容の決定

テーマに合った講師の方を検索し、静岡県内の方を優先的に参加の依頼をしました。最終的に県外の方に依頼することが決定したため、講師の方とオンライン上で打ち合わせを重ねつつ、見やすく効果的に伝わるスライドの作成、会場の一体感や双方向のやり取りを生み出すための問いかけを含めた構成、座っているだけでなく、参加者の印象に残るような身体を使った体験を含めて内容を考えていきます。

以下、実際にサイエンスカフェの軸となった内容の一例です。

例：テーマ・昆虫食 講師・渡邊崇人（徳島大学 助教・株式会社グリラス CEO）

小さな虫に秘められている大きな可能性を知ること、今後の食料・栄養問題や新しい資源として食に昆虫を取り入れることについて考える。実際に会場で試食体験をしてもらうことで、昆虫食の良さを実感してもらう。

3. フライヤー、パンフレット作成・イベント宣伝

宣伝用ポスター・フライヤーを作成し、配布と掲示をしました。情報を把握しやすいレイアウトや印象に残るメインビジュアルにすることを大切にします。掲示する場所も人目に入るよう、大学や近くの福祉施設へ協力をお願いしました。受付フォームへすぐに移動できる効果やより多くの人に知ってもらえるよう、Facebook を用いた宣伝も取り入れました。



作成したポスター

4. サイエンスカフェの実施

開催日当日は、駅から徒歩の距離にある会場をお借りして、会場の設営から来場者受付、撤収まで3時間ほどで行います。事前に作成した運営マニュアルに従って、役割を分担し、スムーズな進行を努めました。講師と参加者を繋げつつ、進行をするファシリテーターは学生が務めました。参加者が落ち着いて集中できる空間づくり（座席やプロジェクターの配置・感染症対策など）を工夫し、受付ではパンフレットやアンケート用紙を配布しました。今回は小規模の開催で、約10名の参加者の方が集まってくださいました。

サイエンスカフェ自体は、休憩とアンケート回答の時間を含めて約90分間で行われました。以下、実際の当日のタイムスケジュールの一例となります。



実際のサイエンスカフェの様子

テーマ：昆虫食 「昆虫食が未来の救世主?!～コオロギから学ぶ新しい食への可能性～」

12:45～ 講師お迎え・移動 / 13:00～ 会場準備・打ち合わせ / 13:30～ 開場・受付

14:00～ 開演1部（挨拶・講師紹介・タンパク質が不足していく可能性・昆虫が環境に優しいわけ・コオロギの栄養価・(株)グリラスの研究、事業展開・昆虫食の商品紹介など）

15:00～ 休憩（試食体験・質問記入） / 15:15 休憩終了

15:15～ 2部（試食感想・質疑応答・まとめ・挨拶） / 15:30 カフェ終了

15:30～ 来場者見送り・アンケート回収・講師見送り・撤収作業 / 16:00 撤収

5. アンケート集計・報告記事作成

サイエンスカフェ内で回答していただいたアンケートを集計しました。アンケートは企画する際にこだわったスライドや宣伝、体験価値などの質問を多く提示したため、参加者にもそのこだわりが伝わり、良い方面に影響したかを知ることができました。アンケート結果から反省点をあげ、改善案を考えて、次回に活かせるように全体で共有し合いました。各グループ、活動報告を記事という形でまとめています。

3. 事業成果・今後の展開

本来であれば、このプロジェクトはもう少し規模の大きい形で実施し、より多くの地域の方に参加していただきたと考えていました。しかし、新型コロナウイルスの影響で、募集人数やオンライン開催への変更を直前まで迷ったことによる告知の遅れがあり、地域の方々の参加を十分に促すことができませんでした。当初、目的として掲げていた、地域の人々の自主的行動のきっかけになることを達成することはできなかったと感じています。しかし、今回のカフェに商業施設の企画を担当されている方が来場され、とても興味を持ってくださり、学生の活動が実際に企画を仕事としている方に新しい視野を与えることができたのであればとても喜ばしいことだと感じました。カフェに参加してくださった方々がテーマやプロジェクトに興味を持ち、自分なりの形で発信してくださることで、自然と広まっていき、サイエンスカフェの認知や新しい企画につながることはないかと思っています。また雑草のカフェに、講師として参加してくださった斎藤さんは後日 SNS 上に、¹⁾「本番は、もう、最高でした。ほとばしりました。ほんとに生き様への愛をぶちまけた。ずっとずっとやりたかった企画をやらずにいたのは、この日を迎える快楽を絶頂に向かわせるためだったのかなと本気で思った」と企画したこちらまで嬉しく感じる感想を記してくださいました。

企画から運営までの全てを、学生主体で行うことは、ほとんどの学生にとって初めての経験でした。本プロジェクトを通じ、時間に追われる大変さや講師の方との短時間での関係性づくりなど、企画の運営において重要な点とプロセスを学ぶことができた実感している学生が多くいます。また、社会の状況などに合わせて臨機応変に対応すること、そのための情報収集の能力もより高められたのではないかと思います。

今回の来場者の中から、サイエンスカフェというプロジェクトに興味を持つ方が、少しでも出てくれたらと望みます。そんな方々のために、オンラインで参加できるサイエンスカフェのお知らせやゼミでのオンライン開催に取り組んでいきたいと考えます。今回の反省点からは学ぶことが多くあったため、その改善を行いつつ、次回の開催に活かそうと前向きに考えています。静岡では、まだ珍しいサイエンスカフェを広めることで、学びと繋がり場を地域または県内に増やしていけるのではないかと期待しています。

¹⁾ facebook「道草プロジェクト」<https://www.facebook.com/道草プロジェクト-310107095991525/>

～サイエンスカフェ～

常葉大学 造形学部 村井ゼミ 3年

下山 絢香 千田 和奈 西山 夢乃 橋山 なぎ紗 渡邊 麻尋 勾坂 柚樹

河村 織華 松下 あい 村松 真優 荒石 磨季 杉山 弥鈴 富田 裕子 真栄田 優季

<プロジェクトの背景・目的、制作過程>

科学技術の社会に対する影響が大きくなるにつれ、双方向性を重視したコミュニケーションを専門家と非専門家の間で行うことが求められるようになってきたが、一般の人が専門家と関わりを持つ場が少ないことが現状である。そこで注目されていることが、「サイエンスカフェ」。サイエンスカフェにより、普段交わることのない専門家と地域の人々が出会い、つながる場を設けることで、地域の人々の視野の拡大や自発的行動のきっかけになるなど、様々な価値を生み出すことが期待される。学生にとっては、企画・運営・報告といった流れを最初から学ぶと同時に、集客・宣伝、カフェの内容の設計を行うことで、今まで学んできたことが実際に通用するかを試す機会となる。

「サイエンスカフェ」とは ... 難しいイメージを持たれる科学について、専門家の講師と参加者が一体となって双方向にやり取りをしながら、ドリンクを片手に科学について楽しく気軽に語りあうイベント。専門家の方と簡単に交流でき、テーマの堅苦しさもないサイエンスカフェは、誰でも参加のしやすい開かれたイベントと言える。

①テーマの決定

科学と社会問題や人間関係など、身近な問題に結びつけて考えられるテーマを選ぶ。その後、テイクホームメッセージ（忘れないでほしい重要な点で、家に持って帰って考えてほしいこと）を考えていく。

②講師・内容の決定

テーマに合った講師の方を検索、参加依頼をする。講師の方と打ち合わせを重ねつつ、スライドの作成・問いかけを含めた構成・印象に残るような体験を含めて内容を考える。

③イベント宣伝

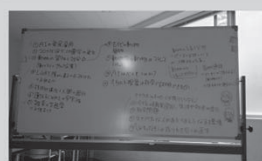
宣伝用ポスター・フライヤーを作成し、配布と掲示を行う。受付フォームへすぐに移動できる効果やより多くの人に知ってもらえるよう、Facebook を用いた宣伝も取り入れた。

④イベントの実施

駅から徒歩の距離にある会場を借り、事前に作成した運営マニュアルに従って、役割を分担し、ファシリテーターは学生が務めた。休憩とアンケート回答の時間を合わせて約 90 分で行われた。

⑤集計・報告記事

サイエンスカフェ内で回答していただいたアンケートの集計。アンケート結果から反省点をあげ、改善案を考え、全体で共有し合った。最終的に活動報告を記事という形でまとめた。



◀テーマ選びの際にグループでアイデア出しを行なう様子



◀実際に作成し広報に使用したフライヤー2種

<サイエンスカフェ 開催>

会場の設営から来場者受付、撤収まで3時間ほどで行う。事前に作成した運営マニュアルに従って、役割を分担し、スムーズな進行を努めた。参加者が落ち着いて集中できる空間づくり（座席やプロジェクターの配置・感染症対策など）を工夫し、受付ではパンフレットやアンケート用紙を配布した。サイエンスカフェ自体は、休憩とアンケート回答の時間を合わせて約 90 分で行われた。

◎実際の当日タイムスケジュールの一例

「昆虫食が未来の救世主? 〜ココロがから学ぶ新しい食への可能性〜」

12:45〜 講師お迎え・移動 / 13:00〜 会場準備・打ち合わせ /

13:30〜 開場・受付 / 14:00〜 開演1部

（講師紹介・タンパク質が不足していく可能性・昆虫が環境に優しいわけ・ココロの栄養価・グリラスの研究、事業展開・昆虫食の商品紹介など）

15:00〜 休憩（試食体験・質問応答） / 15:15 休憩終了

15:15〜 2部（試食感想・質疑応答・まとめ・挨拶） / 15:30 カフェ終了

15:30〜 来場者見送り・アンケート回収・講師見送り・撤収作業 / 16:00 撤収



<まとめ・今後について>

今回、募集人数やオンライン開催への変更を迷ったことによる告知の遅れがあり、地域住民の参加を十分に促すことができず、目的として掲げていた、人々の自主的行動のきっかけになることが達成できなかったと感じる。しかし、商業施設の企画を担当されている方が来場され、学生の活動が実際に企画を仕事としている方に新しい視野を与えることができたのであれば喜ばしいことだと感じた。学生も、企画の運営において重要な点とプロセスを学ぶことができたことと実感している。社会状況に合わせた臨機応変な対応、情報収集の能力も高められたのではないかと。今後、サイエンスカフェというプロジェクトに興味を持ってくれた方々のために、オンラインで参加できるカフェの告知やゼミでオンライン開催に取り組んでいきたい。静岡では、珍しいサイエンスカフェを広めることで、学びと繋がり場を地域または県内に増やしていけるのではないかと期待している。

Dear 静岡人 ～みつけた！コロナに負けない静岡～

所属 : ミズオチ交流会
代表者 : 法学部 鈴木保貴

1. 目的・概要

我々、ミズオチ交流会は学生の視点で、地域や大学周辺の商店街の活性化を目的として活動しているサークルである。

例年であれば、商店街や大学で行われるイベントの企画や運営に携わり活動しているが、今年は新型コロナウイルスの影響により全てのイベントが中止となった。だが、そんなコロナ禍でも商店街の発展を目標に何かできることがあると考え、本企画を立案した。

【企画目的】

本プロジェクトの目的は、コロナ禍で自粛が続く中 SNS を主体に身近にある地元の魅力を再発見するとともに地域活性化を目指すことである。

我々ミズオチ交流会は商店街や地域の活性化を目指し活動しているが、今年はコロナ禍の自粛などで恒例イベント等がほとんど中止となってしまった。昨年のイベント参加者の声を聞いてみると、「人通りが少ない」、「イベントがないと、通行人しかおらず寂しいイメージ」などのマイナスな意見が多かった。それらの課題に加え今年はコロナ禍での自粛などでさらに厳しい状況となりつつある。だが、そんな今だからこそ自粛中でも可能な写真コンテストを開催することで商店街の認知度を高めていきたいと思いこの企画を考えた。

2. 事業内容・方法

(1) イベント企画の宣伝

インスタグラム・ツイッターで、イベントの宣伝を行った。宣伝広報だけでなく、静岡の魅力ある風景を発信し、地域活性化に尽力した。また、イベント内容を記載したチラシを 300 枚作成し、商店街や学校への配布を行った。

(2) 写真の募集

2020 年 12 月 1 日から 12 月 20 日を応募期間として、作品を募集した。募集期間中にも SNS でイベントの宣伝などの広報活動を行った。

(3) 応募写真の審査・結果発表

12 月下旬に交流会と後援会の二段階で審査を行い、決定した受賞者を 1 月 11 日に発表した。

(4) 受賞作品の展示・景品の発送

2021年1月15日から29日まで静岡市民会館通り商店街を写真展の会場にし、受賞作品の展示を行った。また、受賞者には各賞に合わせた静岡県産の特産物を景品として郵送した。



図 1



図 2



図 3



図 4

- ・ 図 1～図 3 写真展示準備
- ・ 図 4 展示風景

3. 事業成果

参加 22 名 投稿数 56 件

常葉大学の学生は勿論、他大学の学生や商店街の方々、チラシを見て参加してくれた方もいた。バリエーション豊かな写真が集まり、静岡の魅力を再確認することができた。また、写真を見てこの場所を訪れたいと言ってくれる方もいた。

受賞者の作品を展示し、商店街を写真展の会場にした。立ち止まって写真を見てくれる方や、「この写真いいね。」と言ってくれる方もいて、楽しんで写真を見てもらえた。また、展示の様子をInstagramに投稿してくれた方もいた。

4. 今後の展望

このプロジェクトは今年度初めて企画されたものであるため、手探りの状態での運営となった。事業成果からみても、地域活性化という難題に対し十分な成果が挙げられたとは言い難い。しかし、プロジェクトを通じて協力して下さった方々との関係を築くことができ、感謝されることもあった。

このような信頼関係やプロジェクトの反省点を次のミズオチ交流会に託し、今後も地域の方々と連携するより良い部活動となるようにしていきたい。



図5 優秀賞



図6 入賞



図7 審査員賞

※最優秀賞は本人の希望のため記載なし。

①「はじめに」

私たちミズオチ交流会は学生の視点で地域や近隣の商店街の活性化を目的に活動している。今年度は新型コロナウイルスの影響により、ミズオチ交流会の主な活動であるイベント実施ができなくなった。そこで今回の「インスタカメラ選手権プロジェクト」は、地域活性化の新しい方法としてSNSを用いた写真コンテストとその受賞作品の商店街への設置を企画したものである。

②「背景」

「インスタカメラ選手権」は、インスタグラム上で静岡の魅力を発信するきっかけを作り静岡の魅力が再発見される機会になることを狙いとしている。また、コロナに負けずに頑張っている方々へエールを届けたいという想いがある。

④「結果」

参加22名 投稿数56件
常葉大学の学生は勿論、他大学の学生や商店街の方々、チラシを見て参加してくれた方もいた。バリエーション豊かな写真が集まり、静岡の魅力を再確認することができた。また、写真を見てこの場所を訪れたいと言ってくれる方もいた。
受賞者の作品を展示し、商店街を写真展の会場にした。立ち止まって写真を見てくれる方や、「この写真いいね。」と言ってくれる方もいて、楽しんで写真を見てもらえた。また、展示の様子をインスタグラムに投稿してくれた方もいた。

③「取組内容」

(1) イベント企画の宣伝

インスタグラム・ツイッターで、イベントの宣伝を行った。宣伝広報だけでなく、静岡の魅力ある風景を発信し、地域活性化に尽力した。また、イベント内容を記載したチラシを300枚作成し、商店街や学校への配布を行った。

(2) 写真の募集

2020年12月1日から12月20日を応募期間として、作品を募集した。募集期間中にもSNSでイベントの宣伝などの広報活動を行った。

(3) 応募写真の審査・結果発表

12月下旬に交流会と後援会の二段階で審査を行い、決定した受賞者を1月11日に発表した。

(4) 受賞作品の展示・景品の発送

2021年1月15日から29日まで静岡市民会館通り商店街を写真展の会場にし、受賞作品の展示を行った。また、受賞者には各賞に合わせた静岡県産の特産物を景品として郵送した。

⑤「課題と今後の展望」

イベントを通して周辺地域の方以外にも商店街の名前を知ってもらうことができた。
今後は実際に足を運んでもらえるようにイベントを開催していきたい。
広報活動や応募期間が短くなったことで参加者数が想定より少なくなってしまった。また、宣伝手段が少なく、情報の受け取り手が限られてしまった。
今後は商店街に合う展示方法を模索し、写真を見てもらえる工夫を重ねていく必要がある。
これらの改善点を踏まえ、今後も写真を通して静岡の魅力を発信し地域貢献を続けていきたい



協力
静岡市民会館通り商店街
大野写真研究室・するが企画観光局
静岡市役所 商業労政課 土木管理課

Gender equality for students ー静岡市におけるジェンダー教育の推進ー

所属：常葉大学ジェンダー研究プロジェクト

外国語学部 佐川花歩 望月美佐（代表）、望月奈緒、田邊楓子

教育学部 松永彩英（会計）

1. 目的・概要

昨年度、静岡県において4年生大学への進学率が性別によって異なるというデータが内閣府より発表された。現在、静岡市はSDGs未来都市・ハブ都市に選ばれており「世界標準のまち」を目指す取り組みを行っている。しかしこのような状況があるにも関わらず、項目の一つである「ジェンダー平等」にはあまり重点を置かれていないということを知り疑問を抱いた。私たちは性別に左右されることなく、自分の未来を選択することのできる世の中を創っていきたいと考えこのプロジェクトを発足した。

今回の活動では静岡市の高校生にジェンダー平等について考えてもらうきっかけ作りの場を設けることにした。これからの未来を担う若い世代に対して、ジェンダーについての知識を広めることは「ジェンダー平等の実現」への足掛かりになるだけでなく、学んだ人が広い視野を持って生きていくためのきっかけづくりになると考えた。

2. 事業内容・方法

高校生は就職や進学など人生を選択する大きな岐路に立っていると考え、高校生を対象とした。静岡市の男子校・女子高・共学校に協力を依頼し、了承が得られた静岡市の3つの高等学校を対象とした。

1. 定性調査 2020年10月

「ジェンダーに関するステレオタイプ」についてのアンケートを実施。高校生がどんなジェンダースtereotypeを持っているか、またそのステレオタイプが彼らの未来にどれくらい影響するかを調査した。調査内容は大きく分けて、卒業後の進路、社会生活、家庭生活の3段階。

仮説：地方学生は親から受けるジェンダースtereotypeの影響が少なからず存在するため、男女間によって進学に何を期待しているか、分かれるのではないかと考えた。高校生であっても、今後のライフプランをどこに重きを置いているか(家庭 or 仕事)で男女間に差が出るのではないかと仮説を立てた。

2. ビデオ作成 2020年12月

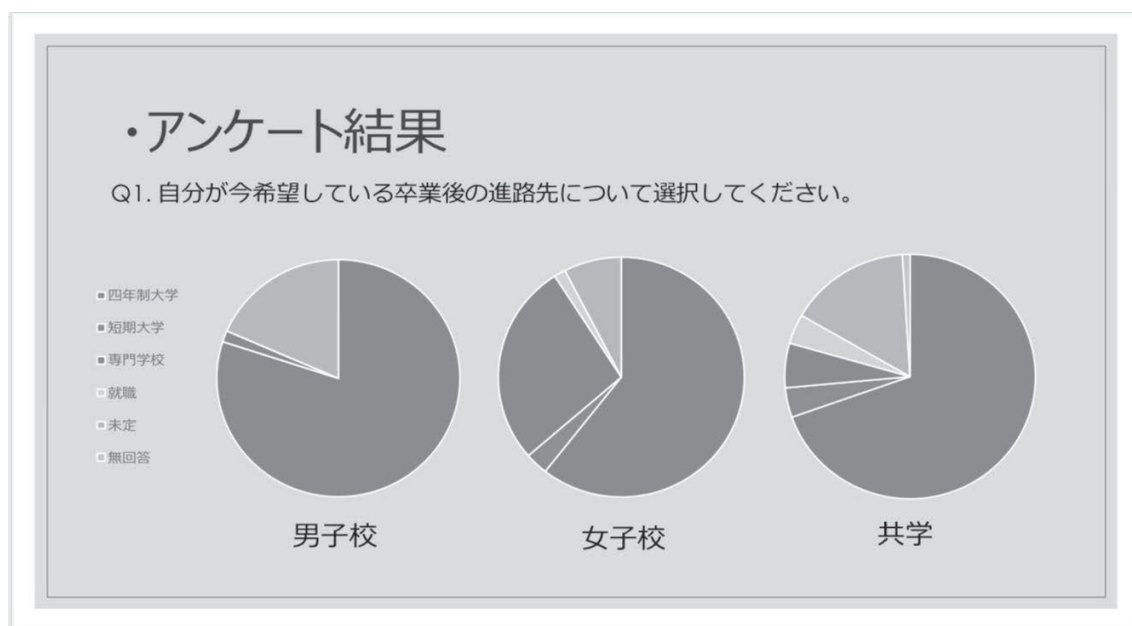
定性調査を基にジェンダーステレオタイプについてのビデオを作成し、定性調査に協力を依頼した3校に視聴してもらった。ビデオ視聴することで、ジェンダーに関する現状を理解し、自身が持つジェンダーステレオタイプの存在に気付いて欲しいと考えた。ビデオ内容は、アンケート結果と実情、メディアとジェンダーステレオタイプとの関連性、まとめの3つを大きな柱とした。高校生に「ジェンダー」という難しい話を少しでも身近に感じてもらうために、テレビコマーシャルやテレビドラマといったメディアに着目し話を進めた。

3. 事後調査 2020年1月

ビデオ視聴後、「ジェンダー平等」に関する未来志向のアンケートを行った。調査内容は、主にジェンダー平等実現についてとビデオの感想である。ビデオを視聴し、高校生が何を考え、将来選択に役立ったのかを調査した。

3. 事業成果

定性調査から、男女間で人生設計に違いがあることが明らかになった。育児休暇を取得したいかや志望進路などが特に男女間で違いがあった。この結果は、アンコンシャスバイアス（自分自身が気づいていないものの見方や歪み・偏り）が関係しているのではないかと考察した。無意識のジェンダーバイアスを克服しなければ、ジェンダー平等を実現することは不可能であると気づき、アンコンシャスバイアスが生まれる原因の一つであるメディアに着目したビデオを作成した。高校生にとって身近なコマーシャルやテレビドラマといったメディアに着目することで分かりやすく、興味を持ってもらうことができた。また事後調査から、「ジェンダー平等について考えるきっかけになった。」という声を聞くことができた。



【定性調査結果】多い順：四年制大学・短期大学・専門学校・就職・未定・無回答

4. 今後の展開

対象者は、ビデオを視聴したことで、自分の持っていたジェンダースtereotypeに気づき、ジェンダー平等や自身の将来選択について考える機会になった。これから、静岡市の高校生だけでなく、幼児や小学生、中学生、大学生にジェンダー平等について考えるきっかけの場を設けて行きたい。誰もが自分らしく自由に生きていくこと、自分とは異なる価値観を持つ人を認め合い、支え合うことのできる社会を静岡市から広めていく。

1. 背景・目的

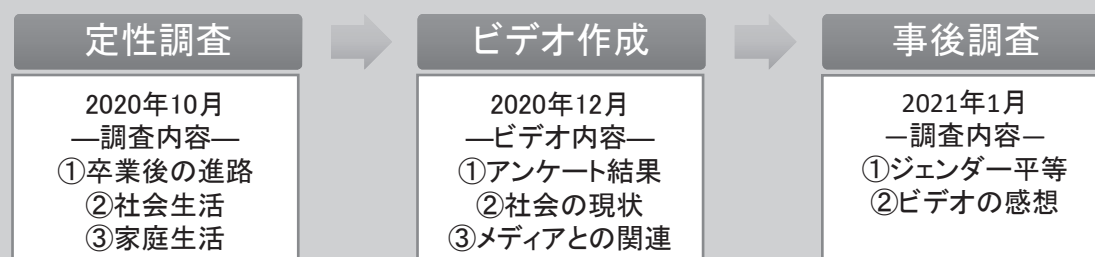
現在、静岡市はSDGs未来都市・ハブ都市に選ばれており「世界標準のまち」を目指す取り組みを行っている。その中の「ジェンダー平等」に興味を持ち、自分の未来を選択することのできる世の中を創っていきたいと考えこのプロジェクトを発足した。

そこで、今回の活動では静岡市の高校生にジェンダー平等について考えてもらいきっかけ作りの場を設けることにした。



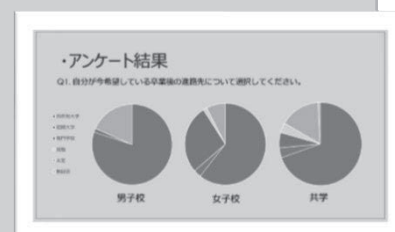
2. 事業内容

高校生は就職や進学など人生を選択する大きな岐路に立っていると考え、高校生を対象とした。静岡市の男子校・女子高・共学校に協力を依頼し、了承が得られた静岡市の3つの高等学校を対象とした。



3. 事業成果

定性調査から、男女間で人生設計に違いがあることが明らかになった。育児休暇を取得したいかや志望進路などが特に男女間で違いがあった。この結果は、アンコンシャスバイアスが関係しているのではないかと考察した。無意識のジェンダーバイアスを克服しなければ、ジェンダー平等を実現することは不可能であると気づき、アンコンシャスバイアスが生まれる原因の一つであるメディアに着目したビデオを作成した。身近なコマーシャルやテレビドラマといったメディアに着目することで分かりやすく、高校生に興味を持ってもらうことができた。また事後調査から、「ジェンダー平等について考えるきっかけになった。」という声を聞くことができた。



4. 展望

対象者は、ビデオを視聴したことで、自分の持っていたジェンダーステレオタイプに気づき、ジェンダー平等や自身の将来選択について考える機会になった。これから、静岡市の高校生だけでなく、幼児や小学生、中学生、大学生にジェンダー平等について考えるきっかけの場を設けて行きたい。誰もが自分らしく自由に生きていくこと、自分とは異なる価値観を持つ人を認め合い、支え合うことのできる社会を静岡市から広めていく。

自治体職員向け建物被害調査プログラムの開発と試行

合同田中ゼミ

代表：社会環境学部 3 年 浅川晃汰

メンバー：社会環境学部 2 年 伊藤綺夏、中村星哉、稲葉郁乃、

社会環境学部 1 年 谷貝美羽、八木一心、田京楓

1. 達成目標

本プロジェクトでは、災害発生時に実査される建物被害調査について、担当する自治体職員に対する研修プログラムを開発し、その試行から効果を確認することを目標とする。

特に従来の建物被害調査研修では十分な対応ができなかった、予習ならびに、実地研修における研修参加者への個別支援についてその方法を検討し、より効果が高いプログラムを構築した。成果は、静岡県地方税滞納整理機構が主催する自治体職員を対象とした研修で試行し、高い評価が得られた。

2. 事業内容・方法

従来の建物被害調査研修のプログラムは、建物被害調査方法を学ぶ座学と実際の建物で調査方法を体験する実習で構成され、これを 1 日で実施するプログラムとなっている。ただし研修内容が多岐にわたるため、1 日の研修で十分な理解を得ることは難しい。そこで本プロジェクトでは、1 日の研修で十分な理解が得られるように、1) 予習用ビデオ教材の製作、2) 実習時の個別支援をおこない、その成果を 3) 事前・事後の質問紙調査で検証する。

1) 予習用ビデオ教材の製作

研修内容は多岐にわたるため、事前に要点を予習できるビデオ教材を作成した（図 1）。ビデオの長さは通勤・休憩時でも閲覧できるように 6 分程度とし、YouTube にアップした。



図 1 予習用ビデオ教材の製作 (<https://youtu.be/Y36i9E6IWzo>)

2) 実習時の個別対応

調査実習では、既存建物に被害に見立てたテープを張り、建物損傷を表現した。建物被害調査には、スマートフォン・アプリを使用して被害を記録する。このアプリは、建物のどこにどのような損傷が発生したかを記録する被害の調査と、記録された損傷から建物全体

の損傷程度を計算する被害の評価の2つの作業を効率的に実施するツールである。座学の研修でこのアプリの使用法を説明するが、実習時の個別のサポートがより重要となる。そこで、メンバーひとりあたり2-3人の研修生を担当する個別サポート体制を構築した。

3) 質問紙の設計と実施

質問紙は、2020年12月8日に実施する静岡県地方税滞納整理機構が主催する自治体職員を対象とした研修で使用するために作成した。質問紙の設計にあたっては、研修生が建物被害調査の経験者・未経験者が混在していることに考慮し、かつ、研修前後で実施し、研修の効果が検証できるように質問内容を検討した。

研修当日のスケジュールは以下の通りである。

- ① 研修前質問紙への回答
- ② 予習用ビデオを使った要点の振り返り
- ③ 建物被害調査の方法(座学)
- ④ 実建物を使った建物被害調査実習
- ⑤ 建物被害評価の方法(座学)
- ⑥ 実習建物の被害評価実習
- ⑦ 被害調査と評価の解説・質疑応答(座学)
- ⑧ 研修後質問紙への回答

1 当てはまる、 2 まあ当てはまる、 3 どちらでもない、 4 どちらかといえば当てはまらない、 5 全く当てはまらない					
1. 講習の内容に満足している	1	2	3	4	5
2. 建物被害調査の目的がわかる	1	2	3	4	5
3. 紙またはアプリケーションで基礎量が入力できる	1	2	3	4	5
4. 紙またはアプリケーションで被害量が入力できる	1	2	3	4	5
5. 建物の損傷率の計算ができる	1	2	3	4	5
6. 内閣府の調査票に結果を入力できる	1	2	3	4	5
7. 半壊、全壊などの被害認定基準の意味が分かる	1	2	3	4	5
8. 建物被害調査アプリの使用法が分かる	1	2	3	4	5
9. 建物被害調査についてアプリケーションを使用した方法を取り入れたいと思う。	1	2	3	4	5

図2 研修後アンケート質問項目

このうち③⑤⑦の座学を本プロジェクトアドバイザーの田中教授が担当し、①②④⑥⑧を本プロジェクトグループが担当した。

3. 事業成果

研修の参加者は20名、そのうち建物被害調査アプリを用いて調査したのは19名であった。



図3 建物被害調査実習の様子



図4 建物被害評価実習の様子

図5—図7に質問紙調査結果の一部を示す。ここでは問2から問7の研修前後の結果につ

いて、「1：当てはまる＝5点、2：まあ当てはまる＝4点、・・・5：全く当てはまらない＝1点」とし、各小問の平均点を出して比較した。図5には研修前後の研修内容の理解度の比較を示す。図5に示すように、全ての項目について理解が向上したことがわかる。これは、実地研修を少人数グループで行ったことや、疑問点があればその都度質問に答えていったことの効果であると考えられる。

今回の参加者の中で建物被害調査の経験がある方が3名、ない方が17名で、85%の参加者が未経験であった。そこで、建物被害調査の経験の有無による理解度の違いについて比較した（図6、図7）。その結果、研修前は経験ありの研修者は、全ての問いで平均点が高く、比較的基礎知識があるが、研修後では、経験なしの研修者の理解度の向上の割合が高くなることが明らかになった。

4. 今後の展開

今回のプログラムのポイントである事前学習動画の作成、実習時の個別支援は、1日の研修でプログラムを完了しようという現状の研修システムには、効果的な対応策であることが明らかになった。今後は事前学習動画の改善だけではなく事後学習動画の作成を行い、より研修の効果を高めていきたい。アンケート調査の内容にも変更改善を行い、事後学習の効果の可視化も重要だと考えている。また、個人ごとに研修の評価点を付ける方法を模索したいと考えている。評価点を付けることで研修を受けた人は建物被害調査で苦手な箇所を把握しやすくなり、復習を行う際に役立つと考えられる。

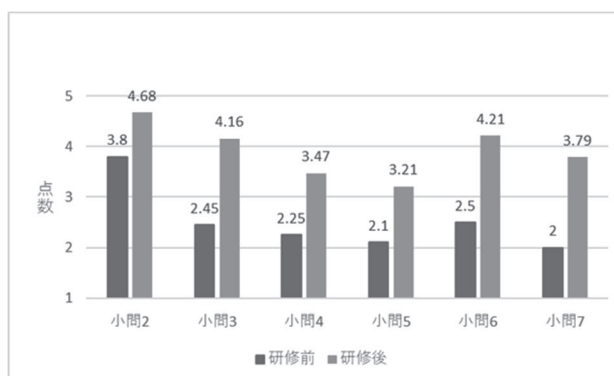


図5 参加者全体における研修前後の理解度変化

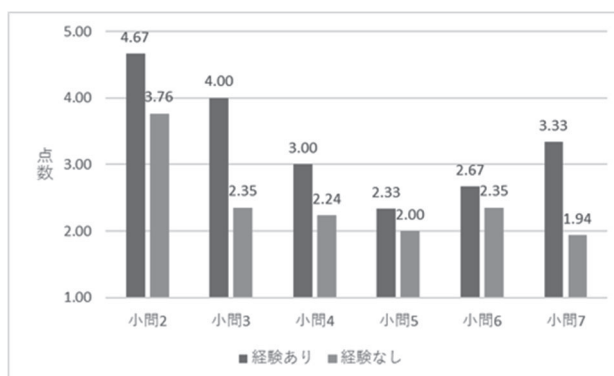


図6 建物被害調査経験の有無による差（研修前）

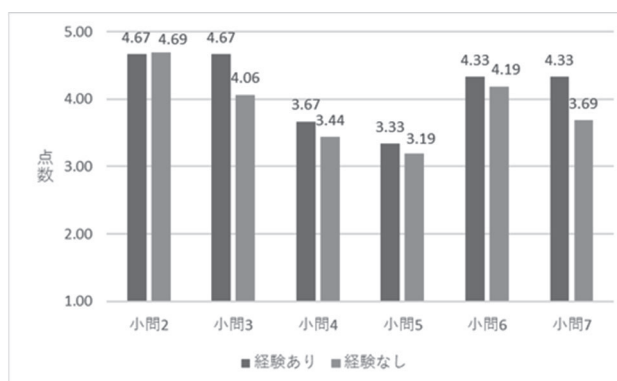


図7 建物被害調査経験の有無による差（研修後）

<活動の目的>

本プロジェクトでは、自治体職員向け建物被害調査の研修プログラムの開発・試行を行った。建物被害調査とは、災害発生後の建物の損傷状況を調査し、その程度を評価することである。本プロジェクトでは、被災者の生活再建支援に必要な「災証明書」のための「建物被害認定調査」について、調査を担当する自治体職員を対象とした研修プログラムの検討・開発・試行を目的とする。特に従来の建物被害調査研修では十分な対応ができなかった、予習ならびに、実地研修における研修参加者への個別支援について検討し、より効果が高いプログラムを構築した。成果は、静岡県地方税滞納整理機構が主催する自治体職員を対象とした研修で試行し、高い評価が得られた。

活動内容

<研修前後アンケート、事前学習動画>

「2020 年度 建物被害認定調査研修会」に向けて、質問紙の作成、および、Web 配信用予習動画を作成した。質問紙は、この研修によって得られた効果を可視化し、改善点を明らかにするために作成した。また、この研修の理解を促進し、研修当日の作業をスムーズにできるように事前学習動画を作成した。動画では、被害調査実習のポイントを抜粋して説明し、さらに建物の傾斜測定の実演も行った。

<研修当日>

研修当日の大まかな流れ
講習前アンケート配布
事前学習動画の振り返り
建物被害調査実習(被害調査・被害評価)
解説・質問
講習後アンケート配布

<モデルハウスを使った被害調査実習>

調査実習では、既存建物に被害に見立てたテープを張り、建物損傷を表現した。建物被害調査には、スマートフォン・アプリを使用して被害を記録する。このアプリの使用方法について、受講者を 2 班に分けて説明を行った。全体で研修を行うより少人数で行うことにより、参加者全体が理解できているかを意識しながら研修を行った。また、受講者同士で情報を共有し、より理解を深めながら研修を行った。

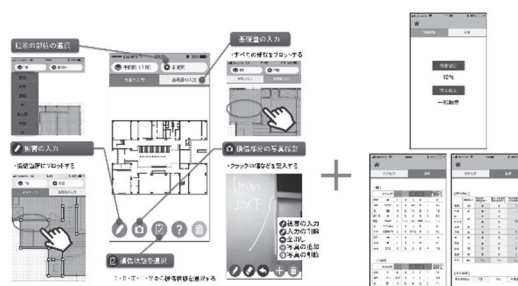


受講者は1階・2階・屋外の3班に分かれ、被害の記入と傾斜測定の実習を行いその後、被害の評価を行った。
参加者からのアプリの操作方法などの質問に対して随時学生が回答した。



<建物被害調査アプリ>

建物被害調査アプリは、建物のどこにどのような損傷が発生したかを記録する被害の調査と、記録された損傷から建物全体の損傷程度を計算する被害の評価の2つの作業を効率的に実施するツールである。



まず、建物の図面をアプリ内に取り込み、実際の損傷を確認しながらアプリ内の図面の上からマーカーをプロットする。次に建物の全壁の長さなど、基本となる量を入力すると自動で建物全体の損傷程度が計算される。この作業は紙図面では複雑な手順となり、アプリを使用することでエラーの発生を減少させることができる。

事業成果

<結果と考察>

アンケートの集計結果から以下のようなことがわかった。

研修前に比べ、全体的に建物被害調査についての理解が向上していた。実地研修を少人数グループで行ったことや、疑問点があればその都度質問に回答したことが影響していると考えられる。しかし、研修後でも確実に理解できたと回答した参加者は一人もいなかった。その理由として、研修ではテープで被害の程度の色分けをしたが、実際の災害現場では自分で程度を判断しなければならず、不安が残ったと考えられる。また今回は、ほぼ全員がアプリを使って損傷程度を計算したため、評価手順について十分な理解が得られなかったと感じたものと考えられる。

自由記述欄には、「アプリを導入したい」という意見がある一方で、「アプリの習得に時間がかかる」という意見もあった。そのため、アプリの操作方法を事前学習動画に入れることや、研修後に疑問点が出てすぐ質問できるサイトなどの環境を整えることも必要だと考える。

今後の展望

今後は事前学習動画の改善だけでなく事後学習動画の作成も行い、より研修の効果を高めていきたい。また、現在個々人に研修の評価点を付ける方法を模索している。評価点を付けることで、研修受講者が建物被害調査の苦手な箇所を把握しやすくなり、復習を行う際に役立つと考えている。

コロナウイルスに負けないぞ！ ～みんなで守って、げんきっず～

所属：保育学部 赤塚めぐみゼミ 3 年

保育学部 宮本夏帆（代表）、佐野莉緒、滝口柚妃、市川芽、増田亜美、石川紗希、大石仁菜、加藤いず美、黒田麻祐子、渡邊鮎美、堀内優花

1. はじめに

昨年度より流行する新型コロナウイルスによって、私たちの生活は一変し、「新しい生活様式」の獲得と遵守が求められている（内閣府，2020）。私たち大学生でさえ、この現状に多くの葛藤があることから、保育施設を利用する子どもやそこで働く保育者においては、より一層の葛藤や生活の不便さがあると推測される。そこで、本プロジェクトでは、保育者を対象にアンケート調査を行い、保育施設における新しい生活様式の推進に関する現状と課題を明らかにする。次いで、その結果に基づき、乳幼児が「新しい生活様式」への理解を深め、これに関連したスキルを獲得するための支援法を検討することを目的とした。

2. With コロナ時代の保育現場の現状と課題（検討 1：アンケート調査）

2-1. 目的

保育施設における新型コロナウイルス感染対策の現状と課題について、アンケート調査を通じて明らかにすることを目的とした。

2-2. 方法

静岡県内において研究協力を得られた 4 市にある認可保育施設 81 ヶ所に在籍する職員のうち、主にクラス担任として勤務する 646 名を対象とした。手続きは、対象施設にアンケート用紙または WEB アンケートのための QR コードを郵送にて配布し、回答を求めた。調査内容は、配属年齢等の基本情報の他、新型コロナウイルス感染予防について保育現場の主な 3 場面（排泄・食事・遊び）で実施している対策と困り感、感染対策の満足度等、計 19 項目から構成された。分析はエクセルを用いて、単純集計を行った。

2-3. 結果

有効回答数は 528（回収率 81.7%）であった。所属する保育施設で実施する新型コロナウイルス対策について「満足している」または「やや満足している」と回答した満足群を A 群、「満足していない」または「やや満足していない」と回答した非満足群を B 群として分析を行った。

2-3-1. 乳児について

A 群は 49 人、B 群は 38 人であった。A 群と B 群の出現比率の差は、排泄場面で「保育者のマスク着用の徹底」17.6%、「おむつ替えの際の手洗いの徹底」17.0%、「おむつ替え前後の消毒の徹底」10.1%であった。食事場面では、「パーテーションの設置」10.2%であった。

一方、遊び場面で10%以上の差のある項目は見られなかった（図1）。

全体の特徴として、感染対策は、排泄・食事・遊びの順に多かった。遊び場面では、感染対策の実施について2群の差は認められなかったが、困り感はB群の方が多かった（図2）。

2-3-2. 幼児について

A群は81人、B群は32人であった。A群とB群の出現比率の差は、排泄の場面で「消毒の徹底」23.3%、「トイレ掃除の徹底」18.4%、「手洗いの徹底」12.2%であった。食事場面では、「食事場所の工夫」28.4%、「あまりしゃべらないように促す」28.4%、「座る位置の工夫」28.2%、「パーテーションの設置」27.2%であった。遊び場面では、「絵本の読み聞かせの子どもの定位置化」25.9%であった（図1）。A群とB群の出現比率の差が10%以上のものは、8項目であった。一方、感染対策における困り感は、遊び場面でB群の出現率が大きかった。特に、「絵本の読み聞かせでの密集」、「歌による飛沫」、「おもちゃごとの密集」においてB群の困り感が大きかった（図2）。

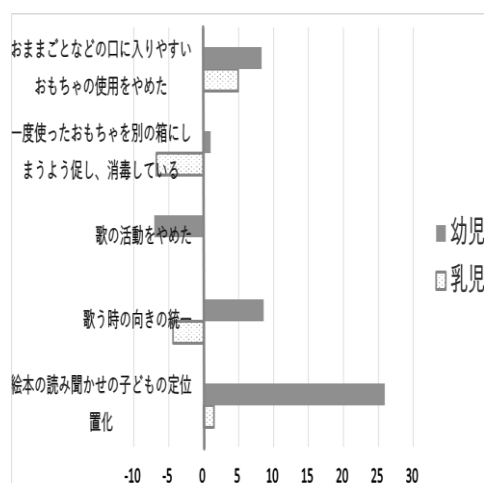


図1. 遊び場面の感染対策（A群とB群の差）

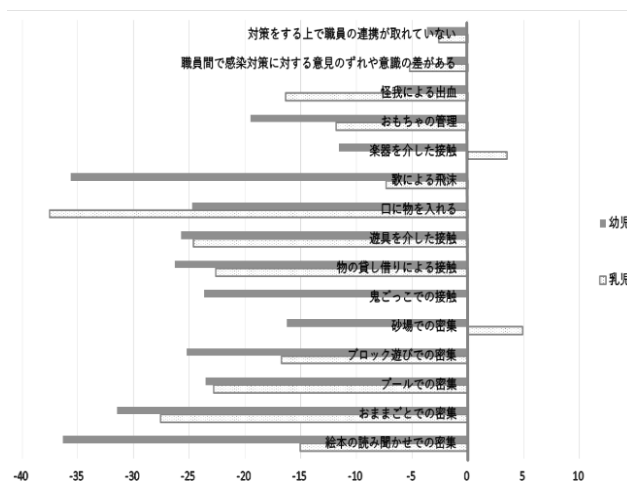


図2. 遊び場面の感染対策における困難さ（A群とB群の差）

2-4. 考察

乳児クラスと幼児クラスの双方において、感染予防対策への満足度は排泄や食事場面での対策の有無が影響していることが示唆された。一方で、B群（非満足群）では遊び場面での対策の困難さが顕著であったことから、これに配慮した保育方法の提案が求められる。

3. 新しい生活様式を導入した保育の提案（検討2：教材開発）

3-1. 目的

検討1では、新型コロナウイルスの感染予防について、排泄や食事場面でのマスク着用や消毒および手洗いの徹底等が対応の満足度に影響することが示唆された。感染対策への非満足群は、遊び場面で困り感が大きいことが明らかとなった。これより、本検討では、withコロナ時代に子どもと活用できる感染予防教材の開発を行うことを目的とした。これらを通じて、withコロナ時代の新しい保育について提案することを目的とした。

3-2. 方法

3-2-1. 視聴覚教材の開発

はじめに、乳幼児が感染予防対策を遂行するにあたり、新型コロナウイルスに関する理解を深めるための動画、正しい手洗いの動画を作成した。その後、「咳エチケット」、「正しいマスクのつけ方」、「トイレのソーシャルディスタンスを守った並び方」「新しい生活様式禍での友達との関わり方」の動画を作成することとした。

3-2-2. With コロナ時代のあそびの開発

既存の遊びである「ハンカチ落とし」をもとに、検討1で整理した保育者の対応困難事項（子ども同士のスキンシップ等）を考慮し、遊びのルールを改善し、新しい遊びを考案する。

3-3. 結果

3-3-1. 視聴覚教材の開発

新型コロナウイルスに関する啓発動画「しんがたコロナウイルスってなんだろう」、および「じょうずなてのあらいかた」の2本の動画については、2021年1月末にWebにて公開した（図3. <https://youtu.be/8BhPmX48Ezc>）。今後、残る4本の動画を順次作成し、webにて公開する予定である。



図3. 新型コロナウイルス啓発動画の例

3-3-2. with コロナ時代のあそびの開発

既存のハンカチ落としに現行の感染予防策をルールに取り入れることで、「ポーズをキャッチ!」というあそびを開発した。子ども同士の密集を避け、大きな声による飛沫とおもちゃを介した接触を回避することをルールに加えた。遊びの詳細は、今後Webで公開する。

3-4. 考察

本検討では、新型コロナウイルスへの理解を促し、感染予防の方法を乳幼児が理解するための動画教材を提供できた。また、感染予防を理由に子どもたちの集団あそびが制限されている現状を踏まえ、感染予防対策をルールに加えた新たな遊びを提案できた。今後は、これらの活用のしやすさや有効性を検証することが必要である。

4. おわりに

本研究より、感染予防対策への満足度は排泄や食事場面での「マスク着用」や「手洗い・消毒の徹底」など、内閣府が提案する基本的な感染予防対策の遂行が関係していることが示唆された。一方、遊び場面の感染予防対策については、乳児クラスと幼児クラスともに困り感が強く、感染予防対策と子どもの育ちに必要な活動とのバランスの難しさがうかがえた。今回開発したwith コロナ時代の保育教材がより多くの場面で活用され、子ども達にとって安全かつ満足できる保育活動につながることを期待したい。

1) 日本赤十字社. 新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう! . 負のスパイラルを断ち切るために.
http://www.jrc.or.jp/activity/saigai/news/200326_006124.html. 2020. 7. 20 閲覧

Memo

学生トレーナーによる高校運動部に所属する 生徒へのコンディショニングセミナー事業

所属：トレーナーサークル CATS

健康プロデュース学部 寺田一成（代表）、松本駿平、石間雄大、小泉徳果
杉山実紗希、高木未来、高橋正憲

1. 目的・概要

アスレティックトレーナーの役割の一つである、コンディショニングの観点から本プロジェクトを企画した。コンディショニングの目的にはパフォーマンスの向上があり、そのことに貢献するトレーニングの手法について検討した。

畠山らは、腹腔内圧が体幹安定性を補助することを明らかにしている¹⁾。また、吉田らは、腹腔内圧に関わる腹横筋と内腹斜筋の筋厚がドローイン時に増大すると報告している²⁾。パフォーマンスの向上には体幹の安定性が重要であり、そのためにはドローインの習得が必要不可欠だといえる。

そこで、体幹安定性を高めるためにドローインの正しい知識と方法を身に付け、適切なコンディショニングを行えるようにし、パフォーマンスの向上に貢献することを目的とする。

2. 事業内容・方法

タイトル：運動部活動生必見！パフォーマンスアップセミナー～コアトレ&ストレッチ～

日時：2020年12月20日（日）

場所：常葉大学浜松キャンパス RCC（リコンディショニングセンター）

対象者：運動部に所属している中学生、高校生

内容：1. 体幹トレーニング

＜ポイント＞

呼吸の仕組みや体幹の筋肉を知り、ポイントをふまえて実習

・呼吸の仕組み

呼吸の仕組みは2つあり、胸式呼吸と腹式呼吸に分けられる。胸式呼吸は、肋骨の間の筋肉を伸び縮みさせ、肺を横に広げることで空気を吸い込む方法です。腹式呼吸は、横隔膜を引き下げることでより多くの空気を吸い込む方法です。より深い呼吸を可能にすることで、日常的な息切れを減らす、運動中の呼吸をさらに快適にしてパフォーマンスの向上につながることを理解することが大切です。

・3種類のトレーニング実践

プランク、キャット&ドッグ、バード&ドッグを行い、どの筋肉が使うのか、正しい動作と正しくない動作などを説明しながら実践した。普段行っている体幹トレーニングとの違いを実感してもらうとともに、そのトレーニングを行うことの目的を改めて理解してもらうことを目的とした。サークル生は参加者1名に対して1人サポートにつくようにして、正しいフォームでできるようにアドバイスすることで中身を濃いものにした。



プランク



キャット&ドッグ



バード&ドッグ

2. 下半身のストレッチング

<ポイント>

解剖学の知識をベースにより効果的なセルフストレッチングの方法を実習

・下肢の筋肉について

下肢の筋肉について、どこにあるかを理解し、ストレッチの際にどのように行うとより効果的なかを理解することを目的とした。発表者はデモンストレーションしながら、自身の体を使って説明した。

・下肢のストレッチングの実践

反動や弾みをつけずに筋肉をゆっくり伸ばしていき、その状態を維持するスタティックストレッチング、伸ばそうとする筋肉の拮抗筋を繰り返し収縮させるダイナミックストレッチング、反動や弾みをつけて行うバリスティックストレッチングを説明し、目的とする筋肉のストレッチング方法を説明した。さらに各ストレッチングのメリット、デメリットを説明し、よく分かりやすく伝えるように努めた。今回用いた筋肉は、臀筋群、腸腰筋、大腿四頭筋、ハムストリングス、内転筋群、下腿三頭筋である。正しいフォームで行うこと、ストレッチングの種類によって使い分けることの大切さを理解することを目的とした。



臀筋群のストレッチング



ハムストリングスのストレッチング



下腿三頭筋のストレッチング

3. 事業成果・考察

<参加者数>

・朝の部	対面：高校生 5 名	オンライン：高校生 2 名	
・昼の部	対面：中学生 5 名		計 12 名

新型コロナウイルスの影響で参加者が少なくなると考え、サークル生が高校に出向いて広報活動を行なったことで開催にこぎつけた。このように自分たちで広報活動していくことは、今後の活動においても継続していきたい。

セミナー中に、「正しいフォームで行うことで、いつも以上に疲れた。」「こんなに筋肉が伸ばされるんだ。」という声があがっていた。さらに、セミナー終了後のアンケートでは、参加者からは「知らないこともたくさん知れた。」「ストレッチの方法を詳しく知れた。」という感想が寄せられ、保護者の方からは、「セミナーで行ったことを継続してやっています。」などの声が届いた。なぜストレッチを行うのかという本質的な部分を理解し、実践してもらうことができ、充実した活動となった。

今回は体幹トレーニング、ストレッチングともに初歩的内容にとどめた。日頃、参加者が行な

っている方法、効果との違いを感じていただき、正しい動作で実践することが効果的なコンディショニングにつながることを知って頂けたと感じた。

このようなセミナーを継続して行うことで、学校部活動での活躍に貢献できるのではないかと考える。



オンライン配信



指導の様子



ソーシャルディスタンス

4. 今後の展開

1. 広報の範囲を広げ、より多くの運動部活動生に参加していただけるようにする。
2. 学校部活動の現場に出向いてセミナーを開催する。
3. オンラインでの開催が今後も重要だと思われるため、オンライン環境を充実させ、県外の方でも参加できるような環境を作る。
4. 継続して開催する。



午前の部



午後の部

-
- 1) 畠山和利, 松永俊樹, 巖見武裕, 大高稿兵, 佐々木研, 佐藤峰善, 渡邊基起, 高橋祐介, 島田洋一
腹腔内圧が体幹安定性に及ぼす影響 3 次元体幹筋骨格モデルによるシミュレーション解析(2015). 第 50 回日本理学療法学会(東京), P1-C-0202
 - 2) 吉田 昌弘, 吉田 真, 盛 智子 Draw-in による腹横筋および内・外腹斜筋の筋厚変化(2011). 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 2,63-69

学生トレーナーによる高校運動部に所属する 生徒へのコンディショニングセミナー事業

常葉大学 健康プロデュース学部 トレーナーサークルCATS
 寺田 一成(代表)、松本 駿平、石間 雄大、小泉 徳果、
 杉山 実紗希、高木 未来、高橋 正憲

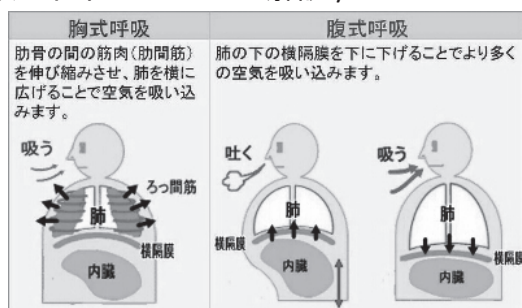
1.活動目的

体幹の安定性を高めるためのドローイン、体幹トレーニングおよびストレッチングを正しく行うための知識と方法を指導し、パフォーマンスの向上に貢献することを目的とする。

2.取り組み内容

1)体幹トレーニング

・呼吸の仕組みについて解説 / ドローインの実習



・3種類のトレーニング実習



プランク

キャット&ドッグ

バード&ドッグ

2)下半身のストレッチング

・下肢筋肉の解説



[主な作用]

ハムストリングス: 膝関節の屈曲、股関節の伸展

臀筋群: 股関節の伸展、外転

内転筋群: 股関節の内転

・ストレッチング実習



ハムストリングス

臀筋群

内転筋群

3.結果

朝の部 7名(対面:5名、オンライン:2名)

昼の部 5名(対面:5名) 合計12名

コロナ禍で申込者がいるのか不安になり、高校に出向いて広報活動を行なった。

体幹トレーニング、ストレッチングを指導していくなかで、「いつも以上に疲れた。」「知らないこともたくさん知れた。」という声があがり、正しく行うことの大切さを知って頂けたと感じた。

なぜストレッチを行うのかという本質的な部分を理解し、実践して頂くことができ、充実した活動となった。



指導の様子



オンライン配信

4.考察

今回は体幹トレーニング、ストレッチングともに初歩的内容にとどめた。日頃から正しい動作で実践することで、効果的なコンディショニングにつながることを知って頂けたと感じた。

このようなセミナーを継続して開催することで、運動部活動でのパフォーマンス向上に貢献できるのではないかと考えた。

5.今後の課題

- ・ 広報の範囲を広げ、より多くの運動部活動生に参加して頂けるようにする。
- ・ 学校部活動の現場に出向いてセミナーを開催する。
- ・ オンラインでの開催が今後も重要だと思われるため、オンライン環境を充実させ、県外の方でも参加できるような環境を作る。



午前の部

午後の部

運動部に所属する子どもの保護者への栄養セミナー -勝負に挑むジュニアアスリートの縁の下の力持ち-

所属：健康プロデュース学部 健康栄養学科 食プロデュースサークル

富田 直希（代表）、武川 明日香、石川 大雅、中尾 幸太郎、堀池 未沙

1. 目的・概要

昨年度のところは未来塾や卒業研究の経験から、運動部に所属する中学生や高校生の食事を支えているのは保護者がほとんどであることが分かった。運動部に所属する中学生や高校生をサポートするためには、保護者の協力はとても重要である。そのため、昨年度のところは未来塾で高校生に伝えてきたことを保護者にも伝える機会を設けたいと考えた。昨年度に作成したパンフレットやレシピを改良し、なぜ食事が重要なのか、おすすめの食材には何があるのかをわかりやすくまとめた。今回のプロジェクトでは、株式会社ジュニアアスリートと株式会社遠鉄ストアとの連携を念頭においた。本サークルでは、以前より、株式会社ジュニアアスリートが発行しているフリーペーパーに栄養のコラムを寄稿しており、その中で、株式会社遠鉄ストアのレシピの紹介をするなど、これらの企業との信頼関係が構築されている。そのため、今回のプロジェクトの目的である保護者へのアプローチをスムーズに進めることができると考えた。

2. 事業内容・方法

昨年度は運動と食事について書かれたパンフレットを用い、高校生に栄養講話を行った。今年度は、普段のサークル活動から交流のある株式会社ジュニアアスリートと株式会社遠鉄ストアと打ち合わせを行い、遠鉄ストア笠井店でパンフレットの配布とアンケートの協力依頼の呼びかけを行った。また、遠鉄ストア全店にパンフレットを20部置かせてもらった。

①パンフレットの改良

昨年度作成したパンフレットを用い、打ち合わせを行った。打ち合わせの中でどのような改良が必要なのかを学生、社会人、保護者目線から話し合った。打ち合わせの中で昨年度のパンフレットをより一般向けにする必要があるとの意見が出た。そのため、レシピ名に、食べるとどのような栄養素が摂取できるのか、また体にどのような影響が出るのかを加えた。また、レシピの最後にアスリートへの一言を加え、なぜ食べてもらいたいのかを一目でわかるようにした。

②パンフレットの配布

株式会社遠鉄ストアにパンフレットの印刷を依頼し、遠鉄ストア全33店にパンフレットを各20部置かせてもらった。また、サークルメンバー2人が遠鉄ストア笠井店に2日間（2021年1月16.17日）行き、150部程度を配った。

③アンケートの実施

これまでの食に関する講話の受講経験、今回のパンフレットの理解度、満足度などについてのアンケートを QR コードでパンフレットの 1 ページ目に載せた。アンケートはグループフォームを使い、無記名で行った。アンケートは選択 6 問、記述式 2 問の 8 問から構成した。アンケートの内容は、属性、栄養講話を聞いたことがあるかどうか、パンフレットの満足度、食事とスポーツとの関わりが理解できたか、食事を考えるきっかけになったか、パンフレットについて不明な点はあるか（自由記述）、お子さんの食事について困っていることはあるか（自由記述）についてである。回答期間は、2021 年 1 月 9 日から 1 月 28 日までとした。

3. 事業成果

今回の日程を表 1 に示す。

表 1. パンフレット配布までのスケジュール

日程	実施内容
10/9	(株) ジュニアアスリート、(株) 遠鉄ストア打ち合わせ
10～11 月	パンフレット修正
12/21	パンフレット配布日打ち合わせ
1/9～	遠鉄ストア笠井店以外にパンフレット設置
1/16. 17	遠鉄ストア笠井店にてパンフレット配布
1/18～	アンケート集計

遠鉄ストア笠井店ではパンフレットを 150 部程度、配布した。そのうちアンケートに回答したのは 8 名であった。属性としては、授業以外でスポーツをしている小学生と中学生の保護者が 5 名、授業以外でスポーツをしている児童・生徒が 1 名、その他が 2 名であった。栄養講話を聞いたことがあるかについては、聞いたことがあると答えた人が 4 名、ないと答えた人が 4 名であった。パンフレットの満足度については、7 名が満足、やや満足と答え、1 名がやや不満と答えた。このパンフレットを読んで、スポーツと食事との関わりが理解できたかについては、全員ができた、ややできたと答えた。食事を考えるきっかけになったかについては、4 名がきっかけになったと答え、4 名は読む前から考えていたと答えた。自由記述で書かれていたことを表 2 に示す。自由記述で書かれたことについては来年度以降のサークル活動で参考にしていく予定である。

今回、遠鉄ストア笠井店でパンフレットの配布とアンケートの協力を呼びかけた。その際、静岡新聞に掲載してもらい多くの方に来店してもらえるようにした。新聞には、運動部に所属する中高生に食事の重要性を伝える活動に取り組む常葉大学食プロデュースサークルスポーツ栄養学グループが、冊子の改良版を作成し、遠鉄ストア笠井店で配布すると書かれた。しかし、新聞をみてパンフレットを受け取った方や当日来店して積極的に受け取ってくださった方は少なかったと考えられる。そのため、授業以外でスポーツを行っている児童・生徒の保護者に多く配ることができなかった可能性がある。今後は、食事のこ

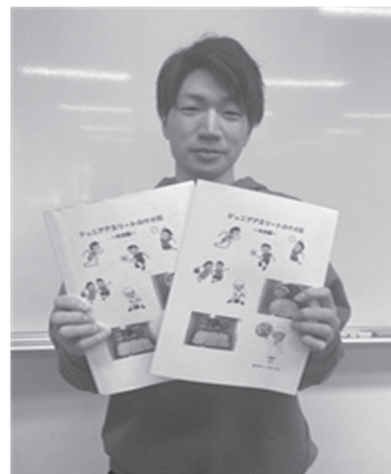
とについて関心がない保護者や生徒・児童も含めてアプローチの方法が重要であると考え
る。

表2 アンケートの自由記述

パンフレットに ついての不明点	<ul style="list-style-type: none"> ・競技別エネルギー摂取量に陸上競技を載せてほしい ・レシピを1人前ではなく、4人前で記載してほしい ・g表記ではなく大さじや1個分などわかりやすくしてほしい ・プロテインや栄養補助食品の説明 ・買い置きしておいた方がよいおやつ ・レシピを増やして欲しい ・お弁当に入れる組み合わせを載せてほしい
お子さんの食事について困っていること	<ul style="list-style-type: none"> ・栄養と消化の関係 ・食事を作るのが手間 ・子供が栄養の必要性を理解しない (特におやつと補食の違い) ・食が細い ・偏食や好き嫌い ・子供の年齢に応じた保護者への指導 ・熱中症やスポーツドリンクについて ・メニューが同じになってしまう

4. 今後の展開

パンフレットを150部程度配ることにより、多くの方に読んでもらえたと考える。アンケートへの回答は少なかったが、それぞれが食についての意識を変え、パフォーマンスの向上に繋がったり、健康を維持することに繋げて欲しい。今回のアンケートの中で出た改善点や困っていること、今後取り上げた方がよいものをサークルメンバー内で話し合い、どうすればより多くの方の意識を変える活動ができるのかを考えていきたい。また、今年度は、補食とスポーツドリンクについてのパンフレットをサークルで作成したため、このパンフレットもうまく活用していきたい。



昨年度作成したパンフレットと
今年度改良したパンフレット

運動部に所属する子どもの保護者への栄養セミナー -勝負に挑むジュニアアスリートの縁の下の力持ち-

常葉大学 健康栄養学科 食プロデュースサークル

1.背景

昨年度のとは未来塾から、運動部に所属する中高生の食事を支えているのは保護者がほとんどであることが分かった。運動部に所属する中高生をサポートするためには、保護者の協力はとても重要である。そのため、昨年度のとは未来塾で高校生に伝えてきたことを保護者にも伝える機会を設けたいと考えた。

2.目的

昨年度作成したパンフレットをより一般向けになるようにレシピの名前を変更したり、なぜこのレシピがおすすめなのかを加えた。改良したパンフレットを用いて、(株)ジュニアアスリートと(株)遠鉄ストアと連携し、パンフレットを各店に設置してもらったと共に、遠鉄ストア笠井店に来店したお客様に配布した。パンフレットを通して、なぜ運動には食事が大事なのかを伝えることを目的とした。

3.内容

年月	実施内容	詳細
2020年10月	打ち合わせ	(株)ジュニアアスリートと(株)遠鉄ストアの方と話し合い、昨年度作成したパンフレットをどのように改良すればよいのかを学生、社会人、保護者目線から話し合った。また、今後どのような形でパンフレットを配布するかを話し合った。
2020年10～12月	パンフレットの改良	打ち合わせの中で出た改良点(レシピ名の変更、アスリートへの一言の追加)を元に、パンフレットの修正を行った。
2021年1月9日	パンフレットの店頭設置	(株)遠鉄ストアにパンフレットの印刷を依頼し、遠鉄ストア全33店に各20部パンフレットを置かせてもらった。
2021年1月16.17日	パンフレット配布	サークルメンバー2人が遠鉄ストア笠井店に2日間行き、150部程度を配った。今回のアンケートはパンフレットの1ページ目にQRコードがあり、そこから回答ができるようになっているため、アンケートへの回答の呼びかけも行った。

4.結果

アンケートに回答してくれたのは8名であった。自由記述で書かれていたことを下に示す。アンケートの内容は、属性、栄養講話を聞いたことがあるかどうか、パンフレットの満足度、食事とスポーツとの関わりが理解できたか、食事を考えるきっかけになったか、パンフレットについて不明な点はあるか(自由記述)、お子さんの食事について困っていることはあるか(自由記述)についてであった。

パンフレットについての不明点

- ・競技別エネルギー摂取量に陸上競技を載せてほしい
- ・レシピを1人前ではなく、4人前で記載してほしい
- ・g表記ではなく大さじや1個分などわかりやすくしてほしい
- ・プロテインや栄養補助食品の説明
- ・買い置きしておいた方がよいおやつ
- ・レシピを増やして欲しい
- ・お弁当に入れる組み合わせを載せてほしい

お子さんの食事について困っていること

- ・栄養と消化の関係
- ・食事を作るのが手間
- ・子供が栄養の必要性を理解しない(特におやつと補食の違い)
- ・食が細い
- ・偏食や好き嫌い
- ・子供の年齢に応じた保護者への指導
- ・熱中症やスポーツドリンクについて
- ・メニューが同じになってしまう

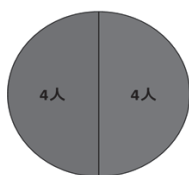


図1 これまでに食に関する栄養講話を聞いたことがあるか

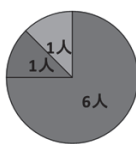


図2 このパンフレットを読んでどの程度満足したか

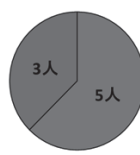


図3 パンフレットを読んで、スポーツと食事の関わりについて理解できたか

4.今後の展望

パンフレットを150部程度配ることにより、多くの方に読んでもらえたと思う。アンケートへの回答は少なかったが、それぞれが食についての意識を変え、パフォーマンスの向上に繋げたり、健康を維持することに繋げて欲しい。今回のアンケートの中で出た改善点や困っていること、今後取り上げた方がよいものをサークルメンバー内で話し合い、どうすればより多くの方の意識を変える活動ができるのかを考えていきたい。また、今年度は、補食とスポーツドリンクについてのパンフレットをサークルで作成したため、このパンフレットもうまく活用していきたい。



アスリートのためのサポ飯 -腹が減っては勝負はできぬ-

所属：健康プロデュース学部 健康栄養学科 食プロデュースサークル

中尾幸太郎（代表）、大橋 歩、池ヶ谷健介、中村瑞穂、袴田虎太郎、松井美来

1. 目的

これまでの学び、また自分達の経験から、運動部に所属する中学生や高校生は、自分の適正なエネルギー量や不足しやすい栄養素を知らない者が多く、学ぶ機会も少ないと感じていた。そのため、私達がこれまでに学んできた食に関する知識を活かし、運動部に所属する中学生や高校生を対象に適正なエネルギー量や不足しやすい栄養素について知る機会を設けたいと考えた。昨年度は昼食（弁当）に着目したため、今年度は補食や水分補給について学ぶ機会を設けた。簡単に作ることができる補食や水分補給のタイミング等についてのパンフレットを作成した。啓発として、作成したパンフレットを用いて、調理体験を含めたセミナーを実施した。講義と体験により補食と水分補給に関する知識を深める場を設け、実践に結び付けることを本プロジェクトの目的とした。

2. 事業内容

ゼミなどで交流のある高校に協力を依頼し、了承が得られた静岡県内の3つの高等学校を対象とした。A高は男子野球部、B高は各部のマネージャー、C高は男子サッカー部であった。今回の事業では、新型コロナウイルスの影響で、2月上旬に予定されていたC高の男子サッカー部を対象にした講話は中止となった。そのため補食と水分補給についての動画を作成した。

①レシピの作成

レシピの作成は「手軽」、「練習前後に活用できる」、「調理が簡単である」をテーマとし、計11品のレシピを考案し、試作を行った。また、完成したレシピを掲載したパンフレットを作成した。パンフレットには1日に必要なエネルギー量や不足しやすい栄養素、補食が必要な理由や補食に適した食べ物、水分補給の重要性や水分補給の方法の一例について解説した。

②セミナーの実施

セミナーは60分で行い、始めの30分を講話、その後30分を調理体験とし、最後にアンケートの記入を依頼した。講話では、水分補給で知ってもらいたいことや試合中に起きる体の水分の変化、飲み物の種類についての説明を行った。補食については、補食で摂りたい栄養素や状況に応じた補食の活用方法、補食で活用したい食材についての説明を行った。調理体験では、パンフレットに掲載したレシピを用いて、高校生を数人の班に分け調理を行った。サークルメンバーは2班に1人の割合でサポートを担当した。練習前に活用

できるおにぎりや練習中、試合中に活用できるスポーツドリンクを調理してもらった。なぜ補食や水分補給が重要であるのかを食べることを通して説明した。

③アンケートの実施

これまでの食に関する講話の受講経験、今回のセミナーの理解度、満足度、今回のセミナーを聞いて、練習前後に補食を摂ることができるか、今回のセミナーを聞いて、自分に合った水分補給をみつけて、実践できるかどうか、次回このような機会があれば参加したいと思うかについて、セミナー実施後に無記名のアンケートを実施した。

④動画の作成

A 高と B 高で使用したスライドを使い、撮影をしながらサークルメンバーに栄養講話を行った。その撮影したデータを C 高に送り、見てもらうことで補食と水分補給について学んでもらうこととした。

3. 事業成果

表 1. セミナーの概要

高校	日程	時間	人数
A 高男子野球部	2020/12/12	9:00～12:00	32
B 高マネージャー	2021/1/12	15:30～18:00	10

今回の調理実習では、パンフレットに掲載してある枝豆・じゃこ・塩昆布のおにぎり、ごまきな粉おにぎり、手作りスポーツドリンクを各人 1 人分ずつ作ってもらった。



(実際に高校生が調理したおにぎりとスポーツドリンク)

全参加者 42 人中 41 人よりアンケートの回答をえた。これまでに食に関する栄養講話を聞いたことがあるかについて、はいと答えた人が 33 人、いいえと答えた人が 8 人であった。今回のセミナーについてどの程度満足したかについては、39 人が満足と答え、2 人がやや満足と答えた。セミナー内容については、よく理解できたと答えた人が 35 人、理解できたと答えた人が 6 人であった。セミナーを聞いて、練習前後で補食を摂ることができるかについては、できると答えた人が 28 人、これまでもできていたと答えた人が 4 人であった。セミナーを聞いて、自分に合った水分補給をみつけて実践できそうかについては、できると答えた人が 29 人、これまでもできていたと答えた人が 3 人であった。最後の二つの質問については、B 高のマネージャーには問わなかった。

アンケートの結果から、多くの生徒が、セミナーを通して補食と水分補給について理解が深まったり、これから実践していくと考えてくれたことが分かった。また、調理実習を通して、自分でもおにぎりを作って食べられそうと答えたり、市販のものでなくても自分好みの味付けをした水分補給ができそうと思ってくれる生徒も多くいた。B高のマネージャーについては、普段から補食を提供しているため、補食の幅が広がったとの声があがった。



(講話の様子)



(調理実習の様子)

4. 今後の展開

対象者はセミナーを受講したことで、適切な補食の摂り方と水分補給を考える機会となった。また、部員については栄養に関する知識を学ぶ以外にも、食事を用意する親やマネージャーの苦勞を知り、親やマネージャーへ感謝するなどのプラスの効果が生まれた。セミナーを実施することで、スポーツを行っている部員の手助けやヒントになり、私たちも将来の仕事に役立てることができると感じた。今後も継続して、様々な高校や対象者に「食とスポーツの関係性」を伝える活動をしていきたい。



1.背景

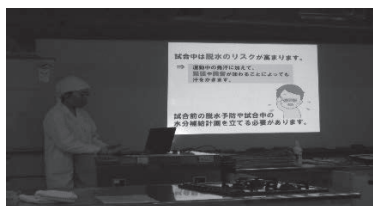
運動部に所属する高校生は、自分の適正なエネルギー量や不足しやすい栄養素を知らない者が多く、学ぶ機会も少ないと感じていた。そのため、私達がこれまでに学んできた食に関する知識を活かし、運動部に所属する高校生を対象に適切な補食の取り方や水分補給の重要性について学習する機会を設けたいと考えた。

2.目的

補食と水分補給に着目し、高校生自身でも簡単に作ることができる料理のレシピ(サポート飯:サポ飯)を考案し、パンフレットの作成を試みた。作成したパンフレットを用いて調理体験を含めた講話を実施し、講義と体験、試食を行い、補食と水分補給に関する知識を深め、体験する場を設け、実践に結び付けることを目的とした。

3.内容

年月	実施内容	詳細
2020年6～9月	レシピの開発	運動部に所属する高校生に補食に適した料理や水分補給のレシピを開発した。テーマは「手軽」「練習前後に活用ができる」「調理が簡単である」。高校生自身でも作りやすいレシピにした。
2020年10月	レシピの試作	考案されたレシピの手順や味付け、栄養価について確認した。レシピの改良を行った。
2020年9～12月	パンフレットの作成	考案されたレシピについて、パンフレットを作成した。パンフレットの冒頭では、運動部に所属する生徒の1日に必要なエネルギー量や不足しやすい栄養素の解説と補食が必要な理由や補食に適した食べ物、水分補給の重要性や水分補給の方法の一例について解説した。
2020年12月 2021年1月	啓発	静岡県内の2高等学校の運動部に所属する高校生を対象にセミナーを実施した。作成したパンフレットを使用し、適切な補食の摂り方や水分補給の説明を行った。参加者は考案されたレシピの調理を体験し、試食した。
2021年2月	動画作成	新型コロナウイルスの影響で講話を行うことができなかった高校を対象に補食と水分補給についての動画を作成した。講話で用いたスライドを使用し、サークルメンバーに栄養講話を行い、その様子を撮影し、データを送った。



講話の様子



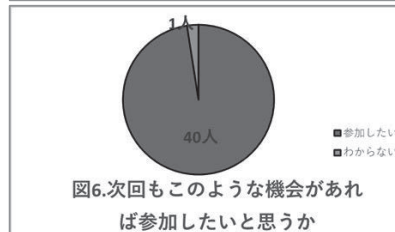
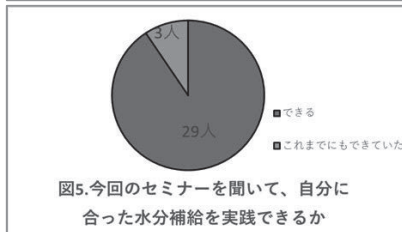
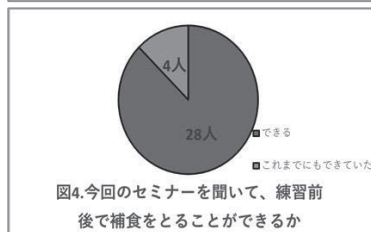
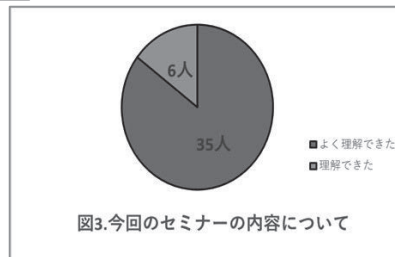
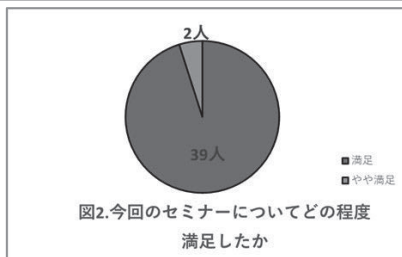
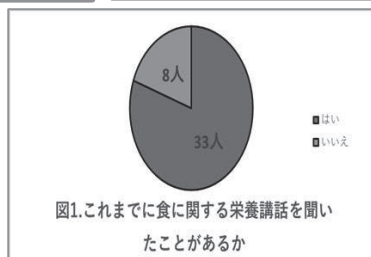
調理実習の様子



実際に調理したもの

4.結果

セミナーへの全参加者42名中41名よりアンケートの回答をえた。(回答率97.6%)。



4.今後の展望

- ・対象者はセミナーを受講したことで、普段の食生活を見直し、どのように改善するかを考える機会となった。また、栄養に関する知識を学ぶ以外にも、食事を用意する親の苦労を知り、親へ感謝するなどのプラスの効果が生まれた。
- ・セミナーを実施することで、スポーツを行っている部員の手助けやヒントになり、私達も将来の仕事に役立てることができると感じた。
- ・今後も継続して、様々な高校や対象者に「食とスポーツの関係性」を伝える活動をしていきたい。



東日本大地震から 10 年、「未来に繋ぐ」これからの 10 年

所属：3.11 はままつ東北復光プロジェクト

加藤小凜(代表)・松下紘大(副代表)・飯田彩乃(会計)

伊藤萌・田中稜真・萩原友暉・藤井杏夏里・宮崎宥多

1. 目的・概要

我が国最大の国難となった東日本大震災から 10 年を迎えようとしている。本団体は東日本大震災の発生から 1 年後の 2012 年から浜松市で 3.11 復光キャンドルナイトを実施してきた。本プロジェクトは、これまで収集した資料や写真を展示し、「3.11 復光キャンドルナイト展」を開催する。また、展示会期間中に、「東日本大震災から 10 年、「未来に繋ぐ」これからの 10 年・シンポジウム」を開催し、静岡県内の災害支援にかかわる学生団体による学生シンポジウム、歴代のキャンドルナイト代表によるシンポジウム、食物アレルギーを持つ人の非常食ワークショップ等を浜松市市民協働センターと共催で開催し、東日本大震災を振り返るとともに、これからの未来に繋ぐため、多くの市民に防災・減災について考え、連携すること、命を守る行動に結びつけるための機会の提供を目的とする。

2. 事業内容・方法

本事業では、以下の 3 つの事業を実施した。

①3.11 復光キャンドルナイト写真展

今までの 3.11 復光キャンドルナイトの資料や写真を浜松市市民協働センターにて、展示した。

展示期間は、12 月 21 日(月)～12 月 27 日(日)、新型コロナウイルス感染対策として、来館者へのアルコール消毒、マスク着用、来館表記入を徹底して行った。また、3 密にならないよう、換気や来館者数制限、ソーシャルディスタンス等も徹底して実施した。

3.11 はままつ東北復光プロジェクトメンバーで、イベント期間中のシフトを組み、受付や会場案内等の担当に分かれて行った。

写真展では、第 1 回から第 9 回の 3.11 復光キャンドルナイトの活動写真やテーマとなった文字の写真、それぞれの年のポスター等を約 7 点展示した。また、第 10 回目となる今年の展示は、活動写真や常葉大学学友会とコラボレーションしたイルミネーションの写真、常葉大学内の花壇に植えたアイリンブループロジェクトの花の苗の写真等の展示を行った。

写真展初日、宮城県石巻市を拠点に活動されているアイリンブループロジェクトと連携してキックオフイベントを行った。代表の菅原氏より、アイリンブループロジェクトの発足のきっかけや全国展開している花の苗を育てることで防災に向き合う活動などの講演があった。また、浜松市内の高齢者が集まって運



動を行う「ひまわり会」とのコラボイベントでは、心身マネジメント学科の学生が中心となって、災害時に起こりやすいエコノミークラス症候群の説明を行い、予防のための運動指導を行った。

②未来に繋ぐシンポジウム

12月26日(土)に、災害や防災、減災にかかわる4つの学生団体が、活動紹介やコロナ禍での活動、これからの活動について、意見交換をする「学生シンポジウム」と3.11復光キャンドルナイトの歴代代表が集まり、それぞれの年代の活動紹介や今までの10年間の振り返る「歴代シンポジウム」を行った。

「学生シンポジウム」では、大阪、神戸の2団体がオンラインで参加し、当団体含め2団体が会場で参加した。



同じ志を持つ、様々な団体との交流を通して、これからの未来に繋ぐ活動とは何か、考えるきっかけづくりや、大学の垣根を越えた素晴らしい出会いの機会となった。今後の活動において、連携の可能性や今後もオンラインを通じた交流の機会を持つことが期待される。

「歴代代表シンポジウム」では、東日本大震災を風化させてならないという強い想いで繋いできたことを再認識し、これからの未来に繋ぐ活動について目指すべき方向を確認することを目的とした。これまでの歴代の代表がどのような想いでこの3.11復光キャンドルナイトを繋ぎ、これから活動する学生へ伝えたいメッセージが発信され、東北への想いと活動することの意義が共有された。

③食物アレルギーを持つ人のための非常食ワークショップ

健康栄養学科の学生を中心に、災害時にアレルギー持った人のための非常食のレシピを紹介した。レシピの冊子の作成と、動画を作成しYouTubeにもアップした。

災害時には多くの人が避難所での生活が強いられるが、食事の多くは一律で配給されるため、食物アレルギーを持つ人にとってはリスクが大きくなる。非常食や防災、災害時に役立つ知識を身につけてもらい、災害が起きた際に活用してもらうことを目的とした。



7日間の写真展、シンポジウムの開催でオンライン参加者も含め、183名の参加者があった。

〈地域との連携〉

本事業は、浜松市民協働センター（浜松市）の共催事業であり、会場の無償提供、イベント広報、シンポジウム当日のオンライン配信等、学生だけではできなかった多くの場面で連携することができ、全面的な支援をいただいた。また、浜松市市民協働地域政策課からもイベント開催の助言をいただくことができた。学生団体では、Seagullrescue（神戸学院大学）、大阪府立大学市民活動センターV-Station（大阪府立大学）、いとでんわ（聖隷クリストファー大学）の4団体が連携して、意見交換を行う有意義なシンポジウムとなった。また、写真展開催時のキックオフイベントでは、アイリンブループロジェクト（宮城

県）や、市民団体「ひまわり会」と連携して事業を実施した。コロナ禍でも協力し合い、お互いの活動を高め合える関係づくりができた。

〈工夫〉

イベント実施においては、来館者や登壇者が安心・安全に参加できるよう、除菌や検温、チェックシートの記入等を徹底して行った。また、会場内の換気、同線や椅子の配置などを工夫し、3密を避けるような会場づくりを行った。

コロナ禍でも、より多くの人々に本事業に参加してもらうため、会場参加とオンライン参加の2つを合わせ、参加を呼び掛け、イベントを実施した。

3. 事業成果

本事業を通して、これまで本団体が行ってきた活動を写真を通じて、また、シンポジウムにおいて活動を言葉として発信することで、市民に災害について考えてもらい、防災・減災の重要性を伝えることができた。また、多くの団体や地域や他大学と交流したことで、災害時における連携することの大切さを改めて感じ、今後活動していくうえでとても良い機会となった。また、同じ悩みや、やりがいなどを共有することで活動意識や仲間意識の向上にも繋がったと考えられる。

歴代シンポジウムでは、これまでの歴史を繋いできた代表の想いを直接聞く機会となり、同じ想いを共有し、継続していくことの意義を再確認することができ、3月11日のイベントに向けての良い活力となった。今まで3.11はままつ東北復光プロジェクトのことを知らなかった人たちにも、活動等を知ってもらう、良い機会となった。

このプロジェクトに参加した学生はそれぞれの学科の学びを通して、（例えば、教師として、管理栄養士として、企業人として、公務員として）進路選択に繋げていける経験となった。

4. 今後の展望

今期は東日本大震災をから10年目の節目を迎える年となる。3.11を風化させないためには、これまで活動してきたこと、経験してきたこと、活動から得られたことを、震災を知らない世代、知っていても興味・関心を持っていない世代に、発信し続けていきたいと考える。

今後もコロナ禍での活動が続くため、オンラインを活用しながらできる工夫を考え、活動を継続していきたい。

【本事業の目的】

我が国最大の国難となった東日本大震災から10年を迎えようとしている。本団体は東日本大震災の発生から1年後の2012年から浜松市で3.11復光キャンドルナイトを実施してきた。本プロジェクトは、これまで収集した資料や写真を展示し、「3.11復光キャンドルナイト展」を開催する。また、展示会期間中に、「東日本大震災から10年、「未来に繋ぐ」これからの10年・シンポジウム」を開催し、静岡県内の災害支援にかかわる学生団体による学生シンポジウム、歴代のキャンドルナイト代表によるシンポジウム、食物アレルギーを持つ人の非常食ワークショップ等を浜松市市民協働センターと共催で開催し、東日本大震災を振り返るとともに、これからの未来に繋ぐため、多くの市民に防災・減災について考え、連携すること、命を守る行動に結びつけるための機会の提供を目的とする。

【3.11復光キャンドルナイト写真展】

東日本大震災が発生した翌年から、3月11日に開催してきた「3.11復光キャンドルナイト」の第1回から第9回までの写真を厳選し、展示した。また、3.11復光キャンドルナイト当日に使用するメッセージカードや、今までに作成してきたチラシやパンフレットの展示も行った。



【未来に繋ぐシンポジウム】

【学生シンポジウム/歴代代表シンポジウム】

4団体の学生による活動紹介、コロナ禍における活動について意見交換を行った。歴代代表シンポジウムでは、活動紹介、東北への想いを共有し、これまでのキャンドルナイトを振り返った。そして、第10回となる節目を迎えるにあたり、これからの10年へと繋ぐ想いを共有することができた。

7日間の写真展、シンポジウムの開催でオンライン参加者も含め、183名の参加者があった

【今後の展望】

今期は東日本大震災をから10年目の節目を迎える年となる。3.11を風化させないためには、これまで活動してきたこと、経験してきたこと、活動から得られたことを、震災を知らない世代、知っていても興味・関心を持っていない世代に、発信し続けていきたいと考える。

今後もコロナ禍での活動が続くため、オンラインを活用しながらできる工夫を考え、活動を継続していきたい。

心身マネジメント学科の学びを活かした安全教育教材の開発

所属：木村ゼミ

健康プロデュース学部 田中稜真(ゼミ長)、加藤小凜(副ゼミ長)、
飯田彩乃、大橋一平、北島溪太、
柴崎大樹、田村直樹、松井統哉

1. 目的・概要

本事業では、心身マネジメント学科の学びの中心となる「こころ・からだ・社会」を活かして、地域と連携した防犯・防災に関する有効な安全教育教材の開発を目的とする。防犯にかかわる関連団体（静岡県警、静岡県防犯協会、企業）との連携による防犯グッズ（リフレクターバンド、防犯ブザー等）の開発を行う。防災では、地域の防災に関連する企業、防災NPOと連携し、非常持ち出し袋、救急処置法にかかわる教材を開発する。これらの使い方や注意事項をまとめた安全教育ハンドブック（冊子）と動画も作成し、無料動画サイトに配信する予定である。また、地域小学校での防災・防犯講座や1月から開幕するBリーグのベルテックス静岡のホームゲームでこれらの教材を活用したブース運営を行う予定である。

2. 事業内容・方法

本事業では、以下の3つの安全教育教材を開発した。

①安全教育ハンドブック

防災・防犯・情報モラル、特殊詐欺、AEDの使い方など、コンパクトにまとめた8頁からなる冊子を作成した。子どもや女性をターゲットにして、学校現場やベルテックス静岡の試合会場で活用していく。AEDの使用法、救急処置法の動画は、ハンドブック内のQRコードから閲覧できるようになっている。学科が所有するAEDと心肺蘇生訓練人形を用いて、動画を撮影した。また、動画編集も学生で行い、わかりやすい動画作成を行った。

防犯、防災に関する安全教育は老若男女問わず重要なことである。緊急時に行動に結びつけることができるためには、日ごろから地域の安全に関心をもっていることが重要である。



〈安全教育ハンドブック〉

②リフレクターバンド

リフレクターバンドは、暗い夜道に光って防犯や交通安全グッズとして効果が期待できる。バックやランドセルに付けたり、ウォーキングやジョギングの際にも反射するため、活用の幅が大きい。

近年、女性の犯罪被害が増加傾向にあることから、自分の身を守るための防犯グッズとして、女性にも好まれるデザインを意識した。

本事業を通して、安全教育ハンドブックの内容とともに、女性の犯罪被害への知識を高めるとともに、有効な防犯グッズの必要性を伝えたい。

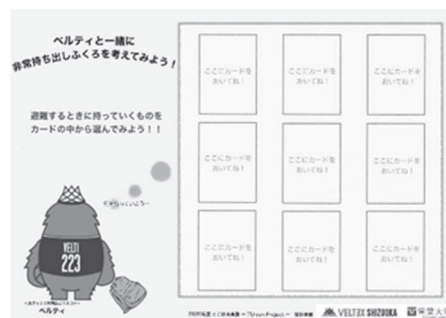


〈リフレクターバンド〉

③非常持ち出し袋

災害時に自宅から持ち出す非常持ち出し袋に関する防災教育教材を開発した。災害に備えて、普段から何を準備しておく必要があるのか、複数のアイテムから優先順位をつけて、準備をしてもらうことを学習してもらう。またこの教材を使って学習していく中で、自分が優先順位をつけたアイテムと、自分以外の誰かが優先順位をつけたアイテムとで違いが出てくる。その違いから、自分が選択したアイテムは非常時に本当に必要なアイテムなのか、それ以上に必要なアイテムはないのかなどのことを考えたり、グループ活動として複数人で行っているのであれば、自分が選択したものはなぜ必要なかを周りに説明し、それに対しての意見を言い合ったりして、非常持ち出し袋を準備することの大切さを学習してもらうとともに、非常時に本当に必要なものは何かという知識をつけてもらう。

近年、静岡県は南海トラフ巨大地震発生時には大きな被害を受けることが予測されている。また、多くの自然災害が毎年多発していることから、災害はいつ起こってもおかしくないという意識は必要である。その備えの1つとして、非常持ち出し袋の準備が必要であると考え。本事業を通して、非常持ち出し袋の有用性を伝えたい。



〈非常持ち出し袋〉

〈工夫〉

安全教育ハンドブックでは、老若男女を対象としているため誰もが手に取りやすいデザインと内容となっており、子ども向けのページにはふりがながふってある。また、画像と動画を用いて作成しており、動画は無料動画サイトに閲覧できるようになっている。動画についてはQRコードを載せているため、手軽に見ることができる。

リフレクターバンドでは、ベルテックス静岡のホームゲームのブースで使用方法を説明するブースを設けるため、防犯グッズとしての活用と、ベルテックス静岡のチームカラーであるオレンジをベースカラーに用いているため応援グッズとしても活用してもらうように

した。

非常持ち出し袋の教材では、40種類のカードの中から9枚しか選ぶことができない設定になっているが、その人にとって最も必要なものの優先順位が可視化できるように工夫した。災害時において持ち出せるものは制限があるため、何を優先して持ち出す必要があるのか考えてもらう教材となっている。そのため、1人ひとりの個性が出て、色々な非常持ち出し袋が完成するようになっている。

〈地域との連携〉

教材開発においては、静岡県警と連携し、内容の監修や助言をもらい教材を開発することができた。また、開発した教材にベルテックス静岡のチームマスコット「ベルティ」のデザインを活用させてもらった。地域小学校での防災講座は実施できなかったが、来年度の実施にむけて、今後も連携していくことが確認された。

3. 事業成果

今年度は新型コロナウイルスの影響で当初予定していた小学校での活動が中止となった。また、緊急事態宣言、県警戒レベル、学内警戒レベルが引き上げられ、1月30日、31日のベルテックス静岡のホーム開幕戦で予定していたブース出展を行うことができず、実際に開発した教材を活用した実践活動を行うことはできなかった。教材開発において、静岡県警やベルテックス静岡と連携することで、普段の大学生活では体験できない貴重な体験をすることができた。心身マネジメント学科で学んだ、「こころ・からだ・社会」という学びを地域貢献に活かす道筋を学ぶことができた。

4. 今後の展望

今後は感染対策を徹底し、適切な時期に学校現場や試合会場で、教材の体験ブースや教材を配布し、アンケート調査を実施する予定である。また、得られたアンケート調査の結果から、心身マネジメント学科の学びを活かした、新たな、安全教育の教材を開発していきたい。

連携先：静岡県警察、ベルテックス静岡、浜松市立飯田小学校

「心身マネジメント学科の学びを活かした安全教育教材の開発」

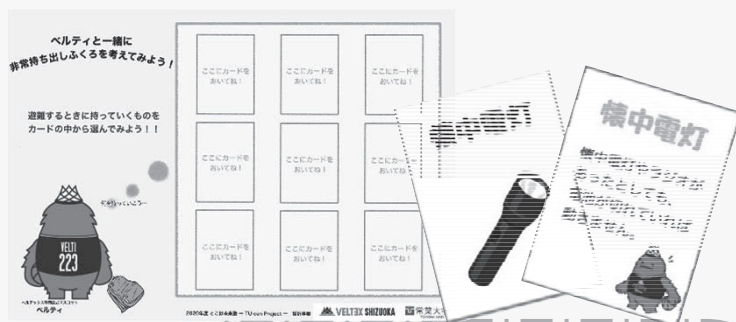
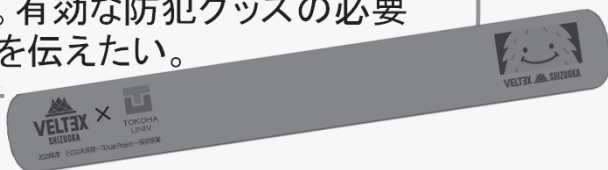
常葉大学 健康プロデュース学部 木村ゼミ 3年
飯田彩乃 大橋一平 加藤小凜 北島溪太 柴崎大樹
田中稜真 田村直輝 松井統哉

【本事業の目的】

地域と連携した防犯・防災に関する有効な安全教育教材の開発を目的とする。リフレクターバンド・非常持ち出し袋・安全教育ハンドブックを作成し、地域の小学校での防災講座で使用する。また、1月から開幕するBリーグのベルテックス静岡のホームゲームでこれらの教材を活用したブース運営を行う。

【リフレクターバンド】

防犯グッズとして開発した。暗い夜道に光って防犯や交通安全グッズとして効果が期待できる。バックやランドセルに付けたり、ウォーキングやジョギングの際にも反射する。有効な防犯グッズの必要性を伝えたい。

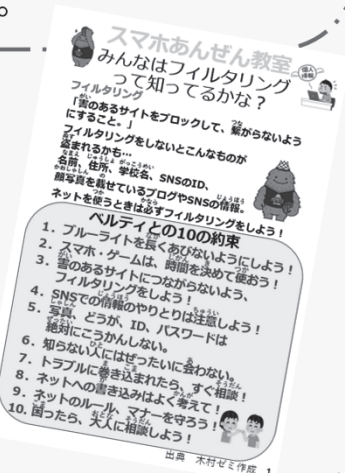


【非常持ち出し袋】

災害時に自宅から持ち出す非常持ち出し袋に関する防災教育教材を開発した。災害に備えて、普段から何を準備しておく必要があるのか、複数のアイテムから優先順位をつけて、準備をしてもらうことを学習してもらう。また、非常時に本当に必要なものは何かという知識をつけてもらう。

【安全教育ハンドブック】

防災・防犯・情報モラル、特殊詐欺、AEDの使い方など、コンパクトにまとめた冊子を作成した。子どもや女性をターゲットにして、学校現場やベルテックス静岡の試合会場で活用していく。AEDの使用法、救急処置法の動画は、ハンドブック内のQRコードから閲覧できるようにしている。



【今後の展望】

今年度は新型コロナウイルスの影響で実際に開発した教材を活用した実践活動を行うことはできなかったが、今後は感染対策を徹底し、適切な時期に学校現場や試合会場で、教材の体験ブースや教材を配布し、アンケート調査を実施する予定である。また、得られたアンケート結果から、心身マネジメント学科の学びを活かした、新たな安全教育の教材を開発していきたい。

連携先: 静岡県警察、ベルテックス静岡、飯田小学校

■静岡草薙キャンパス

〒422-8581 静岡市駿河区弥生町 6-1

TEL. 054-297-6100(代表)

教育学部／外国語学部／経営学部／

社会環境学部／保育学部

短期大学部 日本語日本文学科／保育科

大学院 初等教育高度実践研究科

国際言語文化研究科／環境防災研究科

■静岡瀬名キャンパス

〒420-0911 静岡市葵区瀬名 1-22-1

TEL. 054-263-1125(代表)

造形学部

短期大学部 音楽科

■静岡水落キャンパス

〒420-0831 静岡市葵区水落町 1-30

TEL. 054-297-3200(代表)

法学部／健康科学部

■浜松キャンパス

〒431-2102 浜松市北区都田町 1230

TEL. 053-428-3511(代表)

経営学部／健康プロデュース学部／

保健医療学部

大学院 健康科学研究科



常葉大学
TOKOHA UNIV.

発行：常葉大学 地域貢献センター

発行日：令和3年3月4日

URL <https://www.tokoha-u.ac.jp>